

第1日 5月30日(土)

シンポジウム I (14:30~17:30)

A 会場 (1101 教室)

ウィーン 1945-1966 — オーストリア文学の「悪霊」たち

Wien 1945-1966 — „Dämonen“ in der österreichischen Literatur

司会：桂 元嗣

ドイツ文学史の中でも言及されることの少ない1945年から1966年までのオーストリア、なかでもウィーンにおける文学状況を取り上げ、その意義を問い直すのが当シンポジウムの目的である。Schmidt-Dengler(2000)やKriegleder(2011)によると、1966年という区切りは政治的には①オーストリアにおける連立政権が幕を閉じるという点で実質的な戦後の終わりであるが、文学史的には②この時代のオーストリア文学を代表するハイミート・フォン・ドーデラーが死去し、③次世代を担うペーター・ハントケがデビューするという意味でひとつの転換点である。ハントケやバッハマンらがオーストリアを飛び出して、ドイツ文学もしくは世界文学的な視野で執筆することができたのに対し、この時代のオーストリアで活躍した作家はいずれもドイツとは異なる「オーストリア的なもの」を復権させようとする要請に何らかの形でとらわれている。当シンポジウムではこれを1956年にドーデラーが発表したロマンのタイトルにちなみ、オーストリアの文学状況に今もはびこる「悪霊」ととらえ、4人の代表的な作家(ドーデラー、アルベルト・パリス・ギュータースロー、ジョルジュ・ザイコ、エリアス・カネッティ)を紹介するとともに、当時の文芸雑誌、芸術家集団、文学協会の動向を考察の対象とする。

具体的な進行としては以下のとおりである。

発表1(前田):オットー・バージルの編により刊行された文芸雑誌『プラーン』を分析し、古き佳き「オーストリア的なもの」といかに向き合ったかを、左派論客による主張や、『トゥルム』の特集「オーストリア的なものとは何か」に対する『プラーン』の反応、ナチス・ドイツと運命を共にしたオーストリアの弁明を行ったドーデラーの論考の分析を通じて明らかにする。

発表2(桂):大戦時に国内亡命を強いられた画家兼作家ギュータースローの文学作品、および彼が主宰した芸術家集団「アート・クラブ」の活動を分析し、彼がドーデラーと一線を画しつつも「オーストリア的なもの」を復権させようとする動きの中に取り込まれ、権威化される過程を追う。

発表3(早川):ザイコの小説『葦のなかの男』(1955)やエッセイの分析を通じて、過去を検証せずに「オーストリア的なもの」を安易に再提示する傾向への彼の批判的言説をみる。その際、アウストロ・ファシズム期を小説に描く

ことを避けたドーデラーとは異なる視線をもった国内亡命作家としてのザイコを検証し、1950～60年代のオーストリア国内の文学状況を対比的に示す。発表4（須藤）：亡命作家の忘却と称賛に注目し、戦後オーストリア文学の過去への取り組みを検討する。発表では1960年代以降の動向も射程に入れ、分析の対象にロンドンに亡命したカネッティ夫妻とローベルト・ノイマンをとりあげ、国外の視点を確保する。なかでも、カネッティを称賛するオーストリアの意図と、それに沿うような彼の作家としての周到な自己演出と自己検閲を詳らかにする。

1. 「オーストリア的なるもの」の復興

— 戦後ウィーンの文学・芸術雑誌を手がかりに

前田 佳一

本発表は第二次大戦終戦直後にウィーンで発行されていた文学・芸術雑誌、とりわけ『プラーン』ならびに『トゥルム』を考察することを通じ、オーストリアの文化的復興の一端を明るみに出すことを目的とする。1945年から47年にかけてO・バーヅルの編により刊行されていた『プラーン』は後にオーストリア文学を代表することになる多くの若手作家による活発な投稿がなされ、当時の文壇のプラットフォームともいべき雑誌であったが、旧世代に属し、一時的にナチス党员であったために戦後執筆活動が禁止されていたH・v・ドーデラーにも執筆の場を与えたことなどからもわかるようにその立ち位置は両義的であった。一方46年から48年にかけてオーストリア文化協会の支援の下に発行されていた『トゥルム』はカトリック的世界観に立脚したオーストリア的文化の復興を企図した雑誌であった。「オーストリア的なるもの」とは何かということをめぐる両雑誌のスタンスには大きな相違が見られたがその内実を検証するにあたっては①『プラーン』における左派論客たちによる「ドイツ的なるもの」からの差別化を企図した諸主張、②『トゥルム』における特集「オーストリア的なるものとは何か」とそれに対する『プラーン』誌上での反応、③ドーデラーが『プラーン』において偽名にて発表した論考『間接性における無罪』での自らのナチズムに加担した過去についての弁明等に特に着目する。

2. 『伝説的人物』か、前衛芸術の父か

— 戦後オーストリアとギュータースロー

桂 元嗣

画家兼作家のアルベルト・パリス・ギュータースロー（1887-1973）は、ナチス時代に国内亡命を余儀なくされたが、戦後はウィーンの文壇で中心的な役割を担うことになったハイミート・フォン・ドーデラーの後押しもあり、オースト

リア国家大賞を絵画（1952）と文学（1961）双方の部門で受賞するなど、急速に権威づけられていく。その一方で彼は1946年に国際的な芸術家集団であるアート・クラブを主宰し、戦後オーストリアの偏狭な郷土主義を批判しつつ、H・C・アルトマンやエルンスト・フックスら若い芸術家たちに活動の場を与えるなど、戦後オーストリアの前衛芸術を牽引する指導者的役割も担うことになる。本発表ではグュータースローの絵画・文学双方にわたる広範囲な活動に「オーストリア的なるもの」を復興させようとする戦後ウィーンの状態、とりわけドーデラーの存在がいかなるかたちで関与していたかについて考察する。なかでも「時代の共生（Symbiose der Zeiten）」という概念で説明されるグュータースローの歴史に対する独特な世界観と、ドーデラーのグュータースロー解釈とのずれに着目したうえで、①両者の長きにわたる虚構に満ちた師弟関係、②ヴィーナー・モデルネにおけるグュータースローの芸術活動と、戦後のアート・クラブの活動理念との関係、③1920年代に成立しつつも1946年に「あとがき」を加えて発表されたグュータースローのロマン『伝説的人物』の三点に焦点を当てて考察する。

3. ジョルジュ・ザイコからみた戦後オーストリア —1950年以降の小説とエッセイを手掛かりに

早川 文人

ジョルジュ・ザイコ（1892-1962）は、ウィーン大学で芸術史に関する論文で博士号を取得し、シュールレアリスムやキュビズムなどの現代芸術に関する学問的著作に取り組んだ一方で、文学的関心も抱き続け創作活動を行っていた。1938年アルベルティーナ美術館に徴用され、戦後も勤務を続けていたが、1950年職業作家に転身した。第一次大戦後から《併合》前のオーストリアを描いた長編小説二作『筏の上で』（1948）と『葦のなかの男』（1955）がザイコの主著と目されている。1962年死の直前にザイコは、オーストリア国家大賞（文学）を受賞するまで、作家間ではその名は知られてはいたが、一般読者は少なく、戦後オーストリアの文壇の周辺にいた。本発表では、1955年オーストリアが主権回復に湧くさなか、同年出版された1934年2月というアウストロ・ファシズム時代のザルツブルク近郊の村を舞台とした『葦のなかの男』を中心に扱う。ザイコの小説描写の手法と暴力に駆り立てられる人々の描写の分析を手掛かりに、アウストロ・ファシズムとナチズムの歴史と対峙することをオーストリア戦後文学に要請したザイコの態度を明らかにする。その際、晩年のエッセイ『オーストリア人の裏の顔』（1957）や『オーストリア』（1961）を参照し、ザイコの「オーストリア的なるもの」の理解とそれを安易に提示する姿勢への批判も併せて検証する。

4. 戦後オーストリア文学による忘却と称賛 — 亡命作家ローベルト・ノイマン、ヴェーザ・カネッティ、エリアス・カネッティを例に

須藤 温子

1938年のオーストリア併合によりイギリスに亡命を余儀なくされた作家の多くは苦境の中に生き、やがて本国で忘れられた（パッチュ 1985）。しかしその反面、亡命によって評価を高めた作家たちもいる。本発表は、亡命作家の忘却と称賛に焦点をあて、戦後オーストリア文学における過去へのとりくみを検討する。そのために、亡命以前に成功をおさめていたローベルト・ノイマン（1897-1975）、作家として嘱望されながら夫の裏方に徹したヴェーザ・カネッティ（1897-1963）、しばしば「オーストリア作家」とみなされたエリアス・カネッティ（1905-1994）の亡命体験を描いた自伝的テキストをとりあげて比較する。作品は『プレイグ・ハウスの記録』（ノイマン 1959）、『亀たち』（ヴェーザ 完成 1939 出版 1999）、『眼の戯れ』（カネッティ 1985）などである。終戦から40年後の1985年に作家インゲ・メルケルはカネッティが「上昇気流に乗った」と揶揄しているが、それはオーストリア文学による過去へのとりくみと、カネッティの評価の高まりが時期を一にするからであろう。アウストロ・ファシズムと政治的に対峙したノイマンとヴェーザの自伝的テキストは、イギリスでもオーストリアでも受け入れられなかったのに対し、併合以前の「古き佳きウィーン」を描くカネッティの自伝はベストセラーとなった。オーストリア政府や文学協会（1961年設立）に歓迎された決定的要因が、彼の作家としての周到な自己演出と自己検閲であることを指摘したい。

シンポジウムⅡ(14:30～17:30)

B会場(1002教室)

「ドイツ語教育・学習者の現状に関する調査」に基づきこれからのドイツ語教育を考える

Die Ergebnisse der JGG-Untersuchung und die Zukunft des Deutschunterrichts in Japan

司会：田野 武夫・白井 宏美

日本独文学会による「ドイツ語教育・学習者の現状に関する調査」では、学習者対象の調査結果から以下の点が明らかになった：

- 学習者の多くが、ドイツ語の上達に「文法規則が重要である」と感じ、「文法知識が会話や読み書きの能力に効果的」と回答している一方、ドイツ語に興味を感じない理由として文法や文構造の学習が面倒であると挙げている。文法は学習者にとって重要であるが、学習意欲減退の主たる要因とも

なっていた。

- 学習者の多くが「ドイツ語圏の社会や文化に興味がある」と回答し、ドイツ語学習の意義について「教養を高め人間的視野を広げる」「外国語学習を通して異文化を理解する能力を養成する」を挙げ、ドイツ語授業に望むこととして「ドイツ語圏の文化や社会を知る授業」を挙げていた。
- ドイツ語を続けたいかという問いに対し、半数の学習者が「ドイツ語を続けたい」と回答し、多くが理由として「ドイツ語圏に興味があるから」を挙げている。「続けない」と回答した学習者は、その理由に「続けたいが、他にやらなければならないことが多くある」を挙げていた。

以上の結果から、これからのドイツ語教育を考えるにあたり次の三つの点について議論を深める必要があると思われる：

1. ドイツ語学習者は文法を学ぶことが重要であるとする一方で、文法学習を難しいと感じている。文法を身に着けながら、学習意欲を失うことなくドイツ語能力を高めることができるためにはどうすればよいのか。
2. ドイツ語学習者はドイツ語圏の社会・文化の知識を深め、ドイツ語学習を通じて異文化理解の能力を養成できる授業を望んでいる。こうした授業に向けてドイツ語教員がすべきことは何か、今一度考えてみる必要がある。
3. 多くの学習者が「ドイツ語を続けたい」と思っていることから、継続的なドイツ語学習、学習者の専攻と関連した形でのドイツ語学習を考えることはできないだろうか。

本シンポジウムでは、第一発表者（太田）による調査結果の報告と問題提起を行った後、文法を会話や読み書きの能力につながる形で着実に学べる授業の一つの可能性として、第二発表者（シャルルト）による文法を非明示的に教える授業の紹介を行い、第三発表者（杉谷）による社会・文化への知識を深め、異文化理解の能力を養成する授業に向けて、外国語教育政策の観点から「内容中心」のドイツ語教育への提案を行い、最後に、専門領域とも関連する形での継続的なドイツ語学習のための試みとして、政治学を専門とする教員と共同で運営するドイツ語演習の取り組みを第四発表者（生駒）より紹介する。以上4名の発表をふまえ、ドイツ語学習者のニーズに合うこれからのドイツ語教育のために我々ドイツ語教員は何をすべきなのか、フロアの参加者と討論を行う。

1. 「ドイツ語教育・学習者の現状に関する調査」の概要と結果

太田 達也

日本独文学会による「ドイツ語教育・学習者の現状に関する調査」は、全国のエデュケーション機関およびドイツ語教員・ドイツ語学習者を対象に、日本のドイツ語教育の現状を明らかにしようとする目的で行った調査である。第1回調査は2012年11～12月に実施され、その中間報告書はすでに学会ホームページにて公開されている。2014年6～7月に実施された第2回調査の報告書は、2015年5月ま

で同ホームページ上で公開する予定である。第1回調査では、ドイツ語の授業が開講されている全国の教育機関（大学・短期大学・高等専門学校・高等学校）すべてを調査対象とした。大学については、原則として学部を基本的な単位として調査を実施した。また、独語独文学系・ドイツ学系の学科・専攻については、大学（学部）とは別に調査対象とした。また、各教育機関におけるドイツ語履修者数の推計も行っている。第2回調査では、ドイツ語の授業が開講されている全国の教育機関（大学・短期大学・高等専門学校・高等学校）でドイツ語科目を担当している教員、およびその教員のクラスでドイツ語を学んでいる学習者を対象としたアンケート調査を実施した（教員154名、学習者3,947名）。対象となる教育機関の選定にあたっては、学系のバランス、国立・公立・私立のバランス、都市圏・地方圏のバランスに留意した。なお、独語独文学系・ドイツ学系の学科・専攻については、大学（学部）とは別に調査対象とした。本発表では、この調査の結果の概要を紹介する。

2. Vom Lernziel zum Lernwerkzeug. Die Rolle der Grammatik in einem inhaltsbasierten Deutschunterricht

Michael Schart

Der Beitrag geht zunächst auf grundsätzliche Überlegungen zur Rolle des Grammatiklernens beim institutionalisierten Fremdsprachenerwerb ein und gibt einen kurzen Überblick über den gegenwärtigen Stand der Fremdsprachenforschung zu diesem Thema. Darauf aufbauend wird das Konzept eines konsequent inhaltsbasierten Unterrichts vorgestellt, das in einem Intensivsprachprogramm für deutsche Sprache und Gesellschaft an der Juristischen Fakultät der Keio Universität praktiziert und zugleich auch empirisch erforscht wird. Der Beitrag vertritt die These, dass der Deutschunterricht auch dann erfolgreich und motivationsfördernd sein kann, wenn er auf eine systematische Strukturierung anhand linguistischer Kategorien vollends verzichtet. Sie lässt sich mit Lernergebnissen von Studierenden ebenso untermauern wie mit ihren, sich im Verlauf des ersten Studienjahres verändernden Einstellungen zum Fremdsprachenlernen. Das im Vortrag präsentierte Unterrichtskonzept basiert auf einem thematischen Syllabus, der sich am Fachstudium der Lernenden orientiert (Jura und Politikwissenschaft). Das Nachdenken über grammatische Phänomene verschwindet damit nicht aus dem Unterrichtsgeschehen. Es wird jedoch prinzipiell der Auseinandersetzung mit den fachlichen Inhalten des Unterrichts nach- und untergeordnet. Der Beitrag zeigt die Vorteile dieses Ansatzes auf, kommt aber auch auf die Schwierigkeiten zu sprechen, die sich aus dieser Herangehensweise ergeben.

3. 普通教育課程における言語と社会文化の統合的学習を目指す試案

学習者の「ドイツ語圏の文化や社会を学びたい」という希望は、英語に次ぐ第2の外国語としてのドイツ語の大きなチャンスであろう。「日本言語政策学会・多言語教育推進研究会」では高等学校で複数外国語教育を進めるべく、アラビア語、中国語、ドイツ語、フランス語、韓国・朝鮮語、スペイン語、ロシア語の7言語の指導要領案作成を試みた。普通教育課程の学習者の経験世界から状況や話題を選び、それに即して言語を学習する方法をとり、「言語と社会文化を統合的に学ぶ」一種の「内容中心の外国語教育」の試案である。初級学習者を対象に、社会文化的なテーマを取り上げる指導方法、教材開発に関しては、Deutsch als Fremdsprache (DaF)、特に「ランデスクンデ」の概念や方法が参考になる。しかしこの概念自体、日本の外国語教育界では「異質」であることが多い。他方、複数外国語教育にとっては極めて重要な概念で、英語のみを対象とする日本の外国語教育政策の問題も明らかになる。「内容中心の外国語教育」は、大学では通常「専門領域」との関わりが重要になる。しかし高校の普通教育課程ではそのような特定の分野は想定されにくい。本発表では DaF の領域でコミュニカティブ・アプローチ以降に展開したランデスクンデや異文化理解を目標とする外国語教育の構想や教材の具体例、及び日本での応用可能性について述べる。

4. ドイツ語の継続的学習へ向けて: 政治学の教員と運営するドイツ語圏社会文化演習の試み

生駒 美喜

ドイツ語学習者を対象としたアンケート調査では、半数がドイツ語を「継続したい」と回答し、残る約半数が「継続したいが他にすべきことがある」と回答している。この結果から、ドイツ語学習だけでなく、ドイツ語を用い専門的内容を学べる授業が求められているとも推察できるのではないだろうか。本発表では、専門的内容をドイツ語で学ぶことのできる授業の一つの試みとして、発表者が政治学専門の教員と共同で運営するドイツ語圏社会文化に関する演習を紹介する。

この演習は、政治学の教員とドイツ語学習について意見交換したことがきっかけで始まった。発表者が一人で政治経済の専門的内容を扱うには限界があるが、専門教員と共同で行うことにより、高度で専門的なトピックも演習で扱うことが可能になった。

演習では、ドイツ語圏政治経済の様々なトピックについて、ドイツ語の文献を読んで討論し、発表を行い、ドイツ語でレポートを執筆する。ドイツ語の文献の読み方や語彙・表現の導入は主に発表者が担当するが、内容的に関する問題提起や補足説明は専門教員が行う。

この演習には毎年一定数の受講者がいることから、ドイツ語学習者のニーズはあると確信している。現在は発表者が個人的にこの試みを行っているが、今後は専門的内容と結びつけたドイツ語教育を全体のカリキュラムの中で体系的に組み立てていくことも重要であろうと思われる。

シンポジウム III (14:30~17:30)

C 会場 (1001 教室)

ドイツ語と日本語に現れる空間把握 — 認知と類型の関係を問う

Raumauffassung im Deutschen und im Japanischen

— **Wie sich Kognition in der Typologie widerspiegelt**

司会：田中 慎

コメンテーター：中村 芳久

「人がいかに空間を把握し、言語化するか」は語彙のレベルから始まり様々な文法現象、比喩表現ひいては個々の発話状況に至るまで言語システム全体に関わるきわめて根幹的な問いである。この理解に立ち、本シンポジウムでは

- ① ドイツ語と日本語の空間表現の諸相を認知論的な視点から考察し、
 - ② 空間把握の在り方が言語化する道筋を明らかにし、
 - ③ それらの統合体としてのドイツ語と日本語それぞれの言語類型を浮き彫りにする
- ことを目指す。

本シンポジウムは空間把握が人間言語において果たす役割の重要性に着目し、その言語への反映のあり方を認知・類型の観点から問う。「人がいかに空間を把握し、言語化するか」は語彙レベル（動詞や前置詞）から始まり様々な文法現象（存在構文や移動構文）、さらには発話状況（ダイクシス表現）や比喩表現（メタファー・メトニミー）に至るまで言語システム全体を規定するきわめて根幹的かつ複層的な問題群を成す。そのため例えば前置詞・後置詞の研究（Schröder 1986、Wunderlich 1984、Yoshida 2011、Cheng 2011）、指示・照応の研究（Tanaka 2011）、「視点」（久野 1978）や「場所理論」（Anderson 1971）に基づく文法研究、「移動の類型」についての研究（Talmy 1985、田中・松本 1997）、「構文文法」的な研究（Goldberg 1995、Lasch & Ziem 2011、山梨 2009）、メタファー・メトニミーの立場からの研究（Lakoff & Johnson 1980、Kövecses 2010）、「文法化」現象の研究（Traugott & Heine (eds.) 1991、Diewald 1997）など、数多くの研究が存在している。

本シンポジウムはそれらの問題設定と研究成果を踏まえながら、空間表現の認知・類型の在り方を、集中的かつ俯瞰的に考察する。田中による全体の趣旨説明を受けて、藤縄は従来型の品詞論を見直すことで、「場・存在・所有」をめ

ぐる言語表現の日独比較を行う。宮下はドイツ語と日本語の動詞形態によって行われる空間的把握ならびにその拡張に見られる共通点や相違点を認知と類型の視点から論じる。仁科は空間理解に基づいて「文法化」が生じるさまざまな道筋を日独語を例に考察する。大藪は「対話の場」で話し手と聞き手がいかに共同注意 (*gemeinsame Aufmerksamkeit*) を言語化するかを、間主観性の概念を手がかりに探究する。小川は以上4つの発表でのテーマがいかに有機的に関連し、一個別言語としてのドイツ語、そして日本語の類型が形成されているか、その解明に向けて提案を示す。さらにコメンテーターとして中村芳久氏が、英語学・認知言語学の視点から、各発表へのコメントを行うとともに、認知と類型の関係について、さらなる問題を提起し、新たな展開の可能性を指摘する。

1. 品詞と空間把握の日独比較

藤縄 康弘

Wunderlich (1992) によると、ドイツ語において前置詞を中心に表される A über B のような空間関係は、B を基準にその「上部」領域を規定する関数と、こうして規定された領域に A を位置づける関数との複合と分析される。これに対し日本語の「B ノ上」のような場所名詞は、およそ前者の意味関数を言語化したものであり、A の位置づけは別の語（後置詞や動詞）によって担われる。加えて日本語では、典型的な空間関係を意図する限り、領域は必ずしも明示されない（図書館（ノ中）ニイル vs. er ist in der Bibliothek）。

空間関係の品詞的帰属のこうした差は焦点化の相違に繋がる。ドイツ語の場合、基本的に A が注目を集めるのに対し、日本語ではむしろ B が前景化される。このことは、場所主語の表現方法や場所格交替 (*laden - beladen* など) の分布の差から窺い知ることができる。

しかし、だからと言って、日本語が個体と場所を区別しないというわけではない。顕著な例として「所有」と「所在」の表現が挙げられる。所有者たる「人」と所在地たる「場所」が形態的には同じニ格で示される日本語であっても（先生ニ/金庫ニオ金ガアル）、「所有」のアル・イルと「所在」のアル・イルは、文法機能や語順といった統語的振舞いが根本的に異なり、むしろドイツ語の *haben - sein* の対立に匹敵する。

2. 動詞形態と空間把握

宮下 博幸

ドイツ語の複合動詞には主に不変化詞を伴う不変化詞動詞（分離動詞）と、接頭辞を伴ういわゆる接頭辞動詞（非分離動詞）が含まれる。本発表ではこのうち不変化詞動詞に注目し、日本語の複合動詞との比較を行う。ドイツ語と日

本語の複合動詞は、その成り立ちが異なっている。ドイツ語では不変化詞と動詞が組み合わせられるのに対し、日本語では動詞が組み合わせられ連鎖動詞を形成する。従来の対照研究では不変化詞対不変化詞（例えば心態詞 *denn* と日本語の助詞「の」；小坂 1992）、形容詞対形容詞（伊藤 2007）など、形式的に類似するカテゴリーに基づいて行われることが多かったが、本発表では成り立ちの異なるドイツ語の動詞不変化詞と日本語の複合動詞の第2動詞の機能的な比較を行う。両者にはしばしば機能領域の共通性が見られる。例えば動詞不変化詞 *um-* と複合動詞の第2要素となる「かえる」、動詞不変化詞 *an-* と「かける」の間に空間的移動の意味での対応関係が見られる（*sich umdrehen*：ふりかえる、*anblasen*：ふきかける）。また興味深いことに、これらの表現は空間的な移動のみならず、さらなる意味的拡張の方向に共通性が見られる（*sich umziehen*：着がえる、*antrinken*：飲みかける）。本発表では両言語の複合動詞に見られる機能領域の広がり、さらには意味の展開の方向性について考察する。このような考察を通じて、日独語の背後にある認知的な共通性を明らかにするとともに、差異を生み出す背景についても論じる。

3. 空間把握と文法化

仁科 陽江

文法化については、これまで多くの研究がなされており、空間把握をその出発点とするものは古典的なアプローチの一つである。が、この点から類型論的にドイツ語を検証することはあまりなされていない。本発表では、日本語の「来る」「行く」などの移動動詞や「いる」「ある」などの存在動詞が、非定形の動詞と結びついて文法化され、様々な文法カテゴリーを形成する道筋を示し、ドイツ語や他言語と比較する。日本語に見られる文法化による述語構造の拡張は、テンス、アスペクト、ヴォイスなどのカテゴリーを形成し、生産的に使用されるが、ドイツ語においては、文法体系よりも語彙的表現や構文の項構造で対応することが多い。日本語の豊かな文法化構文に対し、ドイツ語の移動動詞は様々な意味に用いられはするが、それは語彙の多義性の枠を超えるものではなく、構文としての生産性も極めて限られている。理論的に一般化の進む文法化であるが、日本語とドイツ語の間の相違点に注目し、通言語的な見地から文法化を考えることで、言語の類型や、文法化についての議論をより深めることをめざす。また、この議論がドイツ語を母語とする日本語学習者が文法化された日本語空間表現をなぜうまくつかえないかという現象の説明となり、問題解決への示唆となればと思う。

4. 空間把握と間主観性

本発表では、間主観性を手がかりとして、日独語における（広義の）空間把握に見られる異同を論じる。話し手のみならず、聞き手も含めた間主観性を反映する言語現象については、認知言語学や言語類型論における文法化などの議論を通して次第に注目されるようになってきている（Traugott 2003、Horie 2007）。

一方、日本語を対象とした研究においては、聞き手への注意や配慮が言語表現に顕在化するという点について、「情報のなわばり理論」（神尾 1990）や、さらにそれ以前にも待遇表現との関連で指摘されている（例えばコールドウェル 1976）。発表者はかつて、日本語における好まれる事態把握（池上 2003、2004 の「主観的事態把握」、中村 2004 の「I モード」）との関連で、日本語では、話し手のみならず、聞き手も話し手と視点を合わせ、事態の中に臨場する傾向があることを論じた（Ozono 2013）。

このように、話し手と聞き手の相互作用が色濃く影を落としていると考えられる日本語は、空間把握における間主観性の問題を対照的に論じる際に興味深い視点を提供する。本発表では、空間指示のほか、特定の助詞・不変化詞や構文の使用なども対象とし、その異同を観察しながら、背後の原理についても一般化を試みる。

5. 空間把握の類型化に向けて

小川 暁夫

本発表では日独各言語の空間把握の諸相がいかに連動しているか、またその総体として個別言語の類型がいかに形成されるかを問う。ここでは、認知に基づく空間把握の在り方がいかなる形で個別言語に顕在化するのか、それらの個別特徴群を収斂させる類型化は可能なのかを議論する。本発表で主張したいテーゼは「空間把握をめぐる言語現象の類型化に向けて作業仮説を提示できるか、できるとすればいかなるそれかを示す」ことにある。

日独語に備わる文法範疇・構文法・談話形成の種類・可能性は大きく異なるものではないが、個々の範疇・構文・談話の対応関係の不一致は逆に著しい。品詞論（藤縄発表）、動詞形態（宮下発表）、文法化（仁科発表）、間主観性（大藪発表）に関する議論は総じて、日独語の、とりわけ「表層」における不一致の背後にある原理に迫る試みである点で共通している。その背後には普遍的な認知基盤が想定され、それがいわば「引き金」となって個別言語全体の形姿を規定していると考えられる。この挑戦的な課題と取り組むことで、理論言語学（「原理とパラメータ」「含意的普遍」など）に対する実証・反証も視野に入ってきてよう。

空間表現に関する一連の現象とそれらの統合の可能性を探ることで、ドイツ語研究、日独対照言語学のさらなる実質化、そして認知言語学と言語類型論の

共同作業の新たな契機、展開の道筋を示したい。

口頭発表：文学1（14:30～17:45）

D会場（8501教室）

司会：畠山 寛・由比 俊行

1. ヘルダーリン『ディオティーマを慕うメノーンの嘆き』における讃歌的なものについて

小野寺 賢一

ヘルダーリンは『エレギー』を改稿することで『ディオティーマを慕うメノーンの嘆き』（以下『メノーン』と略記）を書いた（1800年春から秋にかけて）。両作品の伝記的背景には、詩人とその恋人の別離がある。従来の研究では、改稿によって生じた変更が詩想の何らかの変化を示すものとして詳細に分析されることは稀である。

『エレギー』には現在を生きる第三者への語りかけがほとんどない。唯一の例外としては、「私」が不特定の第三者に命令文で語りかける箇所がある。しかしそれも、「私」が自分と恋人との閉鎖的な関係を際立たせるために行うにすぎない。改稿後は「親愛なる者たち」への呼びかけが行われるほか、「私」が「他の人たちとともに歌いたい」と発言する。さらに、「私」が「君」から受けた教えを「他の人たちに」伝達すべきであることに思っていた。つまり、改稿前は「私」と「君」との閉じられた関係が問題であったのに対して、改稿作には第三者への指向性が読みとれる。

本発表では、この指向性を讃歌的な要素として指摘する。そのうえで、改稿後にみられるようになったもう一つの公共的性質に着目する。両稿の中心的な修辞表現は道と歩行の暗喩であるが、改稿後はこの暗喩がより首尾一貫して展開されている。先行研究には、作者が当時個人的に抱えていた問題から『メノーン』を読解する傾向がある。しかし、『メノーン』における「私」は、暗喩のより徹底した遂行を通じて構成された一単位としての側面がある。これによって作者の私的経験が改稿後はより抽象化・一般化されていることを指摘したい。

2. ヘルダーリンにおける「教育者」(Erzieher)の概念について

大田 浩司

フリードリヒ・ヘルダーリンは、1795年9月2日付けのヨーハン・ゴットフ

リート・エーベル宛ての手紙で、フォン・カルプ家における家庭教師としての教育の失敗から教訓を汲み取り、独自の教育プログラムを打ち立てた。

ヘルダーリンの教育論は、18世紀ドイツの文化的主導概念であった「衝動」(Trieb)の理論に立脚しつつ、教育者(Erzieher)を子供に理性と人間性への衝動を呼び覚ます存在とみなしている。ヘルダーリンはルソーの教育論から大きな影響を受けつつも、彼の「消極的教育」を批判し、教育者にとって重要なのは「偉大で美しい教材」を使った美的教育によって子供たちを「別のよりよい世界」で包みこむことだと考える。

ドイツの教育学史においてヘルダーリンの教育論はほとんど注目されていない。またヘルダーリン研究においても教育者としてのヘルダーリンというテーマに光をあてた先行研究は少なく(Menze 1983; Herrmann 1995)、またそれらは18世紀の「衝動」の言説、そしてヘルダーリンの教育論と文学作品との関係について深く考察していない。

本発表はまずヘルダーリンの教育論をカント、ルソー、シラーらのそれと比較しつつ、その独自性を明らかにする。それからヘルダーリンの教育論における「教育者」の概念がどのように彼の文学作品[『ヒュペリオン』(1797/99)や詩『あたかも祝いの日の明けゆくとき…』(1800)]にも現れているかを分析し、彼の文学作品の解釈に新しい視座を提供したい。

3. ディオティーマの「熱狂」—フリードリヒ・シュレーゲルの神秘主義的批評と「芸術家」の概念

胡屋 武志

シュレーゲルは初期の論考『ディオティーマについて』(1795)の中で、プラトンの『饗宴』に登場するディオティーマのエロースについての語り「神的な憑依」によるものと考え、このことと関連付けて、彼女が通常そうみなされている娼婦ではなく、ピュタゴラス派の聖職者であると推測している。このシュレーゲルの主張において注目すべきであるのは、彼が抱くギリシアのイメージがヴィンケルマン的なギリシア観を超えた異教的な側面を持つことだけでなく、ここでのディオティーマの語り、シュレーゲルの詩学における芸術家のイメージの具体化となっている点である。イデーエン断章の一つによれば、芸術家は、熱狂とともに他者への憑依によって自己を無化し、宇宙と一体化する「媒介者」である。彼／彼女が対象の本質を描写し、伝達できるためには、対象を手段として利用するのではなく、対象に熱狂し、対象に自らの身を捧げ、その「生贄」とならねばならない。このときの媒介者の死によって対象の生が持続し、拡大するばかりでなく、自己の死を通じて媒介者自身が新たな生を獲得するのである。

本発表では、しばしば1808年のカトリック改宗や後期のオカルティズムと関連付けられるシュレーゲル思想の神秘主義的な傾向がすでに初期の古代研究の

中に明確に存在していることを確認したのち、『ルツィンデ』(1799)や《アテネウム》誌に掲載された断章などを手がかりとして上述の芸術家の規定と批評概念との関連について考察する。

4. J・M・R・レンツの文壇諷刺劇『ドイツのパンダイモニオン』－新しき詩学の予感と実践

今村 武

本発表は、シュトゥルム・ウント・ドラングの詩人ヤーコプ・ミヒャエル・ラインホルト・レンツの文壇諷刺劇『ドイツのパンダイモニオン』を取り上げる。作品が示す同時代の詩学と文学党派的な関連性を解き明かしつつ、若き詩人がゲーテと連帯(することを希望)して標榜する文学と詩学を再検討する。

この作品は1775年当時のドイツ語圏文壇を俯瞰すると共に、一方では揶揄し、他方では称揚することで、レンツ自身の文学的立脚点を明らかにする。ゲーテとレンツ、ヘルダーによる新しい文学の側には、クロプシュトックとレッシングのほか、シェイクスピアまでも登場する。諷刺と批判の対象となるヴィーラントだけではなく、モリエールらフランス古典主義の詩人から、同時代も数多く登場する。これにより、疾風怒濤の詩人から見たドイツ文学の一断面を再構成することが可能である。作品を通じて表明される新たな文学観と詩学は、作中レンツによって予感されるものの、ゲーテが実践すると表明する。この予感と実践の二者の分離は、現実における両者の関係を暗示している。作中のレンツとゲーテの関係は、両者の現実の関係とその後のヴァイマルにおける決裂までも予想させる。

疾風怒濤の文学において重要な一角を占めるジャンルであるにもかかわらず、取り上げられることの少ない諷刺作品研究の可能性を示し、ファルスをも含めたこの分野に今一度ご着目いただければ幸いである。

5. Selbsterfahrung und Autobiographie in Adalbert Stifters *Mappe meines Urgroßvaters*

Yusuke Idenawa

Der Vortrag analysiert die mehrfache Selbstreflexion in Stifters *Die Mappe meines Urgroßvaters*, so dass die Funktion der Autobiographie und ihr Zusammenhang mit der Selbsterfahrung deutlich werden. In der *Mappe meines Urgroßvaters* erfolgen Selbsterfahrungen im Schreiben und Lesen autobiographischer Schriften, und zwar auf zwei Stufen. Auf der ersten Stufe beschreibt der Erzähler autobiographisch seine

Erfahrungen mit sich selbst in der Auseinandersetzung mit der Welt, auf der zweiten Stufe erfährt er die erste noch einmal in der Lektüre seiner Autobiographie. Die erste Stufe stellt eine subjektive Reaktion auf die Welt dar, die zweite dagegen eine Verdoppelung und Entfremdung der Selbsterfahrung.

Die Sekundärliteratur zur *Mappe* ist umfangreich. Meistens bezieht sie sich auf die Darstellung der Natur und den Stil. Einiges hat auch Bezug auf das autobiographische Schreiben, besonders auf genealogische und selbstpädagogische Aspekte. Es wird auch der Unterschied der autobiographischen Systeme in der *Narrenburg* und der *Mappe meines Urgroßvaters* sowie die Selbstreflexion mittels Autobiographie behandelt. In Hinsicht auf die mehrfache Selbstreflexion ist die bisherige Forschung jedoch meiner Ansicht nach unzulänglich. Der Vortrag erläutert die Stufen der Selbsterfahrung, den Zusammenhang zwischen Selbsterfahrung und Autobiographie sowie die Funktion der Autobiographie in der *Mappe meines Urgroßvaters* überhaupt.

口頭発表：文学2・文化・社会（14:30～17:05）

E会場（8502教室）

司会：若林 恵・浅野 洋

1. シュトルムの歴史小説とシュレスヴィヒ・ホルシュタイン問題

加賀 ラビ

この発表で対象となるのは、詩的リアリズムの代表的作家シュトルムの「水に沈む」から「ハーデルスレフフース砦の婚礼」に至る一連の歴史小説である。本発表では、シュレスヴィヒに故郷を持ち、シュレスヴィヒ・ホルシュタインが19世紀半ばにデンマークに対し蜂起した際はこれを支持して、プロイセンが蜂起支援から手を引いたことを批判していたシュトルムが、後年はその態度を微妙に変化させていったことがこれらの歴史小説にはあらわれている、というテーゼを主張するつもりである。シュトルムとシュレスヴィヒ・ホルシュタイン問題の関係については、過去には彼の反デンマーク感情に重点をおく研究が少なくなかったが、近年ではベルンドやデーテリングの研究のように、シュトルムのデンマークとの結びつきを強調するものが目立つ。一方歴史小説については、シュトルムの時代においてこのジャンルは同時代の社会を描いた作品では取り上げにくい事柄をより扱いやすくするという役割を果たしていたことがジャクソンなどによって指摘されている。本発表はこの指摘をふまえ、従来シュトルムのシュレスヴィヒ・ホルシュタイン問題に対する姿勢についての研究では引き合いに出されることが比較的少なかった後年の歴史小説をあえて考察の対象とし、デンマークとプロイセンの間で揺れ動く故郷の状況に対する彼の複雑な思いを浮き彫りにすることを目指す。

2. Nach dem Ende. Eine Infragestellung des Begriffs der Postapokalypse.

Leopold Schloendorff

Der vorliegende Referatsbeitrag beschäftigt sich mit dem Themenkreis moderner Apokalyptik nach 1945, bzw. mit dem Begriff der *Postapokalypse*. Apokalyptisches Denken erweist sich als höchst zeitabhängig, diese Variabilität in Begrifflichkeiten zu fassen, ist eine der noch ungelösten Herausforderungen der Forschung. Besondere Aufmerksamkeit gebührt Kniesches Vorschlag zur Einführung einer Kategorie „*Postapokalypse*“ (Kniesche 1991) im Sinne einer zeitlichen Verlagerung des Geschehens hinter die große Katastrophe bei gleichzeitiger Überwindung der tradierten apokalyptischen Denkmuster. Bei genauer Betrachtung bleibt es jedoch auch in den neueren Apokalypsen zumeist eine kleine Schar Auserwählter (bzw. zumindest ein letzter Mensch), die auf das Ende in Totalität zusteuern und die „*Apokalypsedrohung*“ (Kaiser 1991) markieren, was jedoch wiederum der klassisch jüdisch-christlichen Erzählstruktur vom (nahenden) Ende entspricht. Ob die „*kupierte Apokalypse*“ (Vondung 1988) unserer Zeit als Endzeitvorstellung ohne Heilsversprechen tatsächlich geeignet erscheint, das apokalyptische Denken infrage zu stellen, oder ob sie nicht vielmehr eine Radikalisierung dieser Denkbewegung darstellt, die zudem eher als Analyseinstrument gegenwärtiger Phänomene denn als Zukunftsvision erscheint, soll an Hand folgender Texte erörtert werden:

Schwarze Spiegel (Arno Schmidt), *Die Wand* (Marlen Haushofer), *Großes Solo für Anton* (Herbert Rosendorfer), *Die Rättin* (Günter Grass), *Die Letzte Welt* (Christoph Ransmayr) und *Die Arbeit der Nacht* (Thomas Glavinic).

3. 上演における「言葉」—ロター・シュライアーの表現主義実験演劇

柴田 隆子

舞台での発話は、単に書かれた言葉の再現ではなく、俳優の身体性と結びつき、上演の聴覚空間を構成する重要な要素である。表現主義演劇の理論家であり活動家であったロター・シュライアー (Lothar Schreyer) は、視覚空間と対になって舞台空間を構成する聴覚空間において、観客の認識に働きかける「言葉／音」が持つ可能性を理論と実践の両面から取組んだ。シュライアーは人間の感覚に作用する形体、色、動き、音の4要素の相互連関によって舞台芸術空間は構成されると考えた。聴覚空間では音のリズムや速度、高低や強弱に注目し、舞台上の人間を、言語芸術であるドラマの表現者としてだけでなく、音や声による叫びや音楽を担う存在と位置づけた。彼は発話される「語」における響き

やノイズを重視し、人間の感覚や情動に訴える、意味に還元されない音の要素を探究した。

先行研究では表現主義演劇に関する理論づけを行ったシュライアーの執筆活動と、その実践である舞台実験の試みは別々の文脈で語られ、そのつながりに関しては十分な検討がなされていない。本研究では演劇学者エリカ・フィッシャー＝リヒテの言う「音響性」の観点から表現主義における上演の「言葉」の定義を明らかにすることで、シュライアーの構想する「音」による多元的芸術空間の理論的有効性を明らかにする。

4. 演劇とオペラを架橋する合唱 ―ロルツィングの主要作品におけるその役割

長谷川 悦朗

オペラの中の合唱は、アリアや重唱の歌詞や楽曲と比べて、文学研究と音楽研究の双方において分析対象になることが多いとは言い難い。また、すでに 19 世紀前半にはオペラの中の舞踊と合唱がヨーロッパ諸国に先駆けて定着していたフランスに対して、ドイツの場合には 19 世紀中葉以降のヴァーグナー(1813-1883)作品に至ってようやくオペラ合唱が最高潮に達すると指摘される。それでも、台本作家兼作曲家としてアルベルト・ロルツィング(1801-1851)が完成させた 14 のオペラ作品群には、合唱の活躍が印象深いものが多い。序曲の後で「合唱」とともに幕開けする点に着目すると、《皇帝と船大工》(初演 1836 年)の「船大工たち」、《ハンス・ザックス》(同 1840 年)の「靴職人たち」、《密猟者》(同 1842 年)の「農民たち」、《刀剣鍛冶》(同 1846 年)の「鍛冶職人たち」を列挙することができる。このうち彼の出世作にして代表作でもある《皇帝と船大工》では、集団が一致協力して船舶を完成させようという歌詞は、アンサンブルによるオペラ上演を成功させようという意味への読み換えが可能であり、「合唱」を作者による綱領を体現する機関として位置づけることができる。全三幕とも幕開けと幕切れで舞台上に現前する「合唱」は、視覚的に作品世界の外枠を明瞭化しているが、出来事の外側から筋展開に注釈を加えたり登場人物の感情を代弁したりというよりも、演技する集団として自発的に登場人物と対等に渡り合う点において、演劇とオペラを架橋する機能が付与されているのである。

口頭発表：語学 1 (14:30～17:05)

F 会場 (8701 教室)

司会：高橋 亮介

1. ドイツ語における時制とアスペクトの連動

嶋崎 啓

ドイツ語の時制と語彙的アスペクトの連動については、現在形において本動詞が完了相の場合に未来の事態を表す（例 *Er kommt.*）のに対し、非完了相動詞では現在の状態を表す（例 *Er ist krank.*）ことや、現在完了形において本動詞が完了相であれば現在の結果状態を含意する（例 *Er ist gekommen.*）のに対し、非完了相動詞ではその含意がない（例 *Er ist krank gewesen.*）ことが知られている。一方、日本語において話法的意味を表す過去形は非完了相である（例「財布がこんな所にあった」）という見解を踏まえて、フランス語においても半過去形が話法的意味を持つ（例 *Comment il s'appelait déjà?*「あの人の名前何だっけ」）のは非完了相動詞の場合に多いことが指摘されており、時制と語彙的アスペクトの連動を時制全体の中で考察する必要性が高まっている。未来形については従来、話法的意味が非完了相動詞において生じるという見解と完了相動詞において生じるという相対立する見解があるが、時制的意味を表さずに話法的意味を表すのは非完了相動詞の場合であること、完了相動詞も話法的意味を表すことなどから、未来形においてアスペクトとの連動を主張することは難しいと思われる。しかし、他の時制における連動も傾向でしかないとすれば、未来形においても時制的意味を持たないのは非完了相動詞においてであるという連動を取り出すことはできる。

2. ドイツ語 *zu* 不定詞句の左方領域と内部構造 —動詞の補足成分であるものを対象に

伊藤 克将

動詞の補足成分である *zu* 不定詞句に関して、ドイツ語生成文法の分野において「VP か CP か」という議論が以前からなされてきた。しかしながら、従来は CP であるとして意見がおおむね一致してきた *zu* 不定詞句に関して、その内部における文副詞や心態詞の振る舞いを観察すると、主文の動詞によって *zu* 不定詞句の性質が明らかに異なってくることが分かる。以前の生成文法の立場では、こういった現象は意味論・語用論に委ねられるべき問題として扱われることが多く、あまり検討されてこなかった。

しかし近年では、Rizzi、Cinque らに始まる地勢図的アプローチ (Cartography of Syntax) の枠組みによって左方領域の構造が精緻化され、これまで意味論・語用論に説明が委ねられてきた現象の、統語論とのインターフェースに関する議論が可能になりつつある。ドイツ語においてこの枠組みを採用した研究として Frey (2012) があり、ここではドイツ語の副詞節の振る舞いの非画一性が、ForceP という投射の有無によって説明されている。

本発表ではまず、*zu* 不定詞句に関して、Frey による副詞節の分析をそのまま適用するだけでは不十分なことを示す。そして Haegeman (2014)、Miyagawa (2013) の提案を取り入れ、IP 領域におけるオペレーター移動や、Speech Act

Phrase という投射をドイツ語においても想定することで、ドイツ語の副詞節と zu 不定詞句、およびその内部における文副詞や心態詞の振る舞いを統一的に説明できることを示す。

参考文献：

Frey, Werner. (2012). On two types of adverbial clauses allowing root phenomena. In: Aelbrecht, L., Haegeman, L. & Nye, R. (eds.) *Main Clause Phenomena: New Horizons*, 405–429. Amsterdam: Benjamins.

Haegeman, Liliane. (2014). Locality and the distribution of main clause phenomena. In: Aboh, E. O., Guasti, M. T. & Roberts, I. (eds.) *Locality*, 186–222. Oxford: Oxford University Press.

Miyagawa, Shigeru. (2013). Surprising agreements at C and T. Ms. MIT.

3. ベートーベンの言語生活を垣間見る –wegen の格支配をめぐる歴史語用論的考察

佐藤 恵

晩年に聴覚を失ったベートーベン（1770-1827 年）が家族や知人と交わした筆談帳は、過去の話しことばを再構成するのに極めて重要な資料となる。本発表は、この筆談帳を言語資料にして、19 世紀初頭における言語使用の状況ないし慣習を再構成しようとするものである。具体的な分析対象としては、前置詞 wegen の格支配を扱う。

まず、筆談帳、手紙、理論書という異なる言語の使用場面を分析してみると、理論書ではもっぱら〈wegen+2 格〉を使用するベートーベンが、筆談帳ではほとんどもっぱら〈wegen+3 格〉を使用し、手紙では〈wegen+3 格〉が圧倒的に優勢となっている。このことから、〈wegen+2 格〉は書きことば的で形式性がより高い異形で、〈wegen+3 格〉は話しことば的で親密度のより高い異形であったものと想定される。次に、筆談帳に書き込んだベートーベン以外の人物（ベートーベンの「会話」相手）における wegen の格支配を詳細に検討してみると、ベートーベンの甥カールにきわめて特異で興味深い言語使用が観察される。カールは、もうひとりの伯父ヨハン（ベートーベンの弟）に対しては親密性のより高い〈wegen+3 格〉を多く用いているにもかかわらず、ベートーベンに対してはほとんどもっぱら形式性のより高い〈wegen+2 格〉を用いているのである。このことは、カールがベートーベンに対して心理的に距離を置いていたことの傍証と解釈することが可能であり、カールとベートーベンが実際に良好な関係になかったという史実とも符号する。

4. ルクセンブルク語北部方言の文章語での使用

田村 建一

ルクセンブルクの公用語はフランス語、ドイツ語、ルクセンブルク語の三言

語であるが、このうちルクセンブルク語は、19世紀半ば以降の文章語化のプロセスを経てドイツ語の一方言から独立した「造成言語 (Ausbausprache)」である。1984年の言語法で公用語化されて以来、この言語は標準化が進み、文章語での使用も増加している一方で、方言もよく保持され、方言間の違いもよく認識されている。

発表者は、2013年と2014年に北部のヴィルツ地区およびクレルヴォー地区に居住する方言話者に対し、言語生活に関するインタビュー調査を実施した。その結果、調査協力者たちのほとんどが、年齢や社会階層を問わず、知人や友人、親類との間では、会話のみならず、メール等の電子メディアでも方言を使用し、さらに人によっては、地域向けの雑誌、学校内の保護者宛て文書等の文書においても方言を使用することがわかった。協力者たちは、必要に応じて標準ルクセンブルク語を話したり書いたりすることもできることから、こうした方言使用は、自らの地域アイデンティティを示す行為と見なせるであろう。本発表では、調査結果を紹介しながら、特に文章語として方言を使用することの社会言語学的な意味について考察する。

ポスター発表 (13:00~14:30)

G会場 (8号館7階・談話コーナー)

1. 文学と美術を横断するキュビズム

— カール・アインシュタインにおけるパラダイム転換 —

鈴木 芳子

「表現主義きっての理論家」と言われた作家・美術批評家カール・アインシュタイン(1885-1940)は今まで文学の観点から、あるいは美術批評の観点からそれぞれ別個に研究されてきた。文学・美術の双方のフィールドを自在に行き来した彼は、古典主義的美術様式では表現できないほどエキサイティングで多面的で豊かな世界を開示できるキュビズムという新たな芸術運動に、新たな文学の可能性を見出し、キュビズム小説『ベビュカン——奇蹟のディレクターたち』(1912)を執筆、一躍表現主義の寵児になる。その後、『黒人彫刻』(1915)ではヴィルヘルム帝国の「文化および文化人」と「未開人」の形態言語を対置させ、アフリカ彫刻の仮面に近代ヨーロッパの狭隘な個人主義から脱する大いなる力を見出し、原初主義に貢献し、さらに『二十世紀の芸術』(1926)ではアヴァンギャルドの心性に注目するなど、芸術が公衆の視覚を左右し、芸術家による創造が人々の世界観を変えるというパラダイム転換を打ち出した。

本発表では当時のドイツの時代背景と照らし合わせながら、破壊と再生をくりかえす芸術運動を死と生のダイナミズムにおいてとらえ、常に表現の最先端にあつて、従来の美術史・芸術理論の枠を越え、哲学や美学、心理学や民族学

など多彩な視点で執筆活動をしたカール・アインシュタインの先見性と問題意識に着目し、文学・美術による世界変革の可能性を考えたい。

2. Die erste Stunde Deutsch. Einstieg in eine neue Fremdsprache.

Oliver Mayer

Diese Präsentation befasst sich mit der Gestaltung der allerersten Unterrichtsstunde eines Deutschkurses an einer japanischen Hochschule. Die erste Unterrichtsstunde eines neuen Kurses hat eine besondere Bedeutung. Nicht nur sehen sich Teilnehmer und Lehrkräfte das erste Mal, oft ist es auch die allererste Begegnung der Teilnehmer mit dem Stoff dieses Unterrichts, also der deutschen Sprache.

Das Poster zeigt die einzelnen Einheiten der ersten Unterrichtsstunde, wie sie der Vortragende schon mehrmals durchgeführt hat. Dabei liegt der Schwerpunkt auf zwei Themen:

1. Bereits in der ersten Stunde soll ein Erfolgserlebnis in der neuen Fremdsprache vermittelt werden. Konkret ist das Ziel, innerhalb von 90 Minuten einen Dialog einzuüben, der aus etwa fünf Sätzen besteht und als Inhalt eine Selbstvorstellung sowie die Frage nach dem Befinden des Gesprächspartners hat. Mit diesem Erfolgserlebnis soll die Motivation der Teilnehmer erhöht und das Interesse an der deutschen Sprache geweckt werden.
2. Die Stunde kommt fast ohne Uebersetzungen ins Japanische aus, weil mehrfach auf das Vorwissen der Teilnehmer (Englisch) zurückgegriffen wird.

3. 情報の再構築から観察する読み

—日本語を母語とするドイツ語学習者に対する要約課題を手がかりに

西出 佳詩子

本発表では、日本語を母語とするドイツ語学習者の読みについて、テキストの構造把握に焦点をあて、文章理解の実態の一側面を明らかにしようと試みた事例研究を紹介する。読みとは、読み手がテキストに関連する既有知識をテキストに働きかけながら情報の処理を進めていくダイナミックな言語行為である。読みは、これまで言語学や外国語教育などの諸分野で注目されてきたが、ドイツ語テキストの読みに関しては十分に論じられていない。読みのプロセスにみられる現象を示すことによって、学習者の読みの様相を考察する。

発表では、CEFRのB1レベルの読む力を持つ学習者29名を対象に250語程度のドイツ語新聞記事を読みテキストとして用いた事例をとりあげる。読み手独自のテキストへの働きかけを検証する手がかりとして、情報の選択や削除

といった再構築が求められる要約課題を用い、テキストの構造をどのように把握したかを、要約文におけるマクロ命題の残存状況から分析した。その結果、テキストのマクロ命題をとらえようとする姿勢が調査協力者の多くにみられ、中には、情報間の関係を自ら見だし、原文とは異なる新たなテキスト構造を再構築するというテキストへの働きかけも一部にみられた。テキストのミクロレベルの言語指標（例：再録）だけでなく、テキスト全体の構造といったマクロレベルの捉え方も含めた包括的な観点から読みのプロセスを探る可能性を示し、意見交換する場としたい。

4. ドイツの「食」はいかに変化してきたか —生活改革運動から現在まで—

佐藤 温子

本発表は、近年、ドイツにおいて菜食主義者が約 780 万人（ドイツベジタリアン連盟（VEBU）2015 年 1 月発表）を数え益々増加傾向にあるのはなぜなのかという疑問に対して、政治的および科学的に望ましい食の表象が歴史的に形成され再生産されてきたという仮説を検証するものである。

そもそも菜食の歴史は、古代ギリシアのピタゴラスまで遡り、20 世紀初頭には比較的学問的に論争されていた。そのなかでも本発表は、19 世紀から現在までを対象とし、とりわけ世紀転換期に行われた生活改革運動の一つであった菜食主義運動と、現在の菜食主義のあり方を比較する。

ドイツ社会は、限られた食料を奪い合う状況から、消費者が自らの意思で豊富な選択肢の中から決定できるまでに変化した。ときに食は、食品産業界と社会に抗議し、グローバルな経済的・政治的転換を促す手段とさえなる。食が糾弾する対象としては、たとえば、工業化社会、ファーストフード、化学物質・農薬、食のスキャンダル、原発事故、遺伝子工学等が挙げられる。こうした視点をもつことにより、本研究では、19 世紀から現在までのドイツの環境史に「食」という身近な題材からアプローチすることにもなる。

方法としては、医師や栄養学者等の専門家、著名人、ドイツ栄養協会、ベジタリアン協会等の活動に加えて、食に関する著作、『デア・シュピーゲル』誌等のメディア報道における表象、世論調査結果を分析する。

5. Sprachlernspiele – ein Unterrichtsmittel mit hohem pädagogischem Potenzial — Teil 2

Marco Schulze

These:

Um herauszufinden, was Sprachlernspiele eigentlich sind, muss man zuerst einmal die Phänomene – Sprache, Lernen und Spielen – verstehen, definieren sowie deren Gemeinsamkeiten und Schnittpunkte klar benennen. Darüber hinaus ist es wichtig, den Ort (Unterricht) sowie den Zweck (Unterrichtsmittel/Lernmittel) des Einsatzes von Sprachlernspielen zu bestimmen. Erst dann ist es möglich, die entscheidenden Parameter, die „echte“ Sprachlernspiele charakterisieren, zu lokalisieren und zu definieren. Sind diese Charakteristika erkannt, können Abgrenzungen zu anderen Tätigkeiten aber auch sinnvolle Kategorisierungen vorgenommen und Überlegungen zu den zu erwartenden Effekten von Sprachlernspielen formuliert werden.

Methode:

Mittels Literaturstudium versuche ich aus Definitionen unterschiedlicher Wissenschaftsbereiche notwendige Informationen zu den einzelnen Phänomenen – Sprache, Lernen, Spielen, Lehren, Unterricht – herauszufiltern und neu zu strukturieren. Das ist notwendig, da aufgrund der unterschiedlichen Zielsetzungen in den einzelnen Wissenschaften, die zu den Definitionen geführt haben, diese für meine Fragestellung nur bedingt übertragbar sind.

Inhalt:

In der Poster-Präsentation werde ich auf 15 Eigenschaften der Tätigkeit „Spielen“ eingehen, auf die ich während meiner Forschung gestoßen bin. Mittels dieser von mir definierten Eigenschaften, werde ich die Möglichkeit, klare und eindeutige Abgrenzungen zu allen anderen menschlichen Tätigkeiten zu machen, aufzeigen. Darüber hinaus werde ich meine neusten Sprachlernspielideen vorstellen.

ブース発表 1 (14:00~15:30)

H 会場 (1302 教室)

Hörübungen in Lehrwerken Deutsch als Fremdsprache – kritische Bestandsaufnahme und Analyse

Gabriela Schmidt, Katrin Niewalda, Shinichi Sakamoto

Dem Hören wird im Bereich der Fremdsprachenvermittlung oft weniger Beachtung geschenkt als den anderen Fertigkeiten. Übungen zum Hörverstehen stellen jedoch gerade für japanische Deutschlernende eine besondere Lernschwierigkeit dar. Da sich der Kontakt zur Zielsprache in den meisten Fällen auf die kurze Unterrichtszeit beschränkt, ist es notwendig, die Fertigkeit Hörverstehen gezielt in den Unterricht zu integrieren, um sie zu verbessern.

In der Präsentation sollen Übungen zum Hörverstehen in einer Auswahl von Lehrwerken exemplarisch vorgestellt werden, wobei Aspekte wie extensives Hören, intensives Hören, Hörstrategien, Hörstile (global, selektiv, detailliert) besonders berücksichtigt werden. Bei der Analyse der Übungen zum Hörverstehen können sowohl Aspekte des allgemeinen Fremdspracherwerbs als auch hörstrategische und individuelle Lernziele beachtet werden. Um eine Verbesserung der Fertigkeit Hörverstehen insgesamt zu erreichen, ist es außerdem notwendig, nicht nur Aufgaben, die ergebnisorientiert und damit auf Überprüfung hin ausgelegt sind, sondern auch prozessorientierte Unterrichtsaktivitäten einzubeziehen. In der Präsentation werden verschiedene Aspekte von Übungen zum Hörverstehen anhand ausgewählter Lehrwerke diskutiert und weitere Aufgaben vorgestellt, in die modellhaft die genannten Aspekte eingearbeitet sind.

ブース発表 2 (14:00~15:30)

I 会場 (1301 教室)

生涯学習における小規模ドイツ語教室の現状と展望

堀口 順子

ドイツ語学習を生涯にわたるプロセスとして捉えることの意義が指摘されており、2013 年春季学会ではシンポジウム「生涯教育としてのドイツ語教育を考える」が開催された。その中で、大学外・卒業後にドイツ語を学ぶ場として日独協会やドイツ文化センター等が紹介された。これらは、団体、教育機関として学会会員や社会に認知されているが、日本全国で考えると数が限られ、また都市部に集中している。

生涯学習としてのドイツ語教育では、学習者にとって身近なところにドイツ語を学ぶ場が存在することが学習を可能にする要件の一つである。生涯学習の学習者は、まず就労者や生活者であり、そこから生じる制約の中で可能な場合にのみ学習することができるからである。このように考えたとき、ドイツ語関連団体や教育機関に属さない小規模なドイツ語教室にも、そこで良質な授業が提供されるのであれば、存在意義があるように思える。

発表者は、地元の生涯学習の団体で 1990 年から、二十数年にわたってドイツ語の授業を担当してきた。現在は平日の午後と夜の 2 つのクラスを教えている。ここでの授業について、大学における授業環境と比較しながら、報告を行いたい。報告では、受講生の手記やアンケート結果、映像をホワイトボードに投影する小型の機器も紹介したい。会場参加者の中に同じような小規模ドイツ語教室における授業の経験がある方がいらっしゃるようであればその経験を話していただき、その上で、このような小規模授業教室が意味のある存在として存続し続けるためには何が必要かを共に考えたい。

ブース発表 3 (14:00~15:30)

J 会場 (1402 教室)

PASCH 校におけるドイツ語教育 —中等教育からのドイツ語学習

柴田 育子, 須江 康司, 能登 慶和, 中山 匡, 丸山 智子

PASCH (Schulen: Partner der Zukunft URL: <http://www.pasch-net.de/>) とは, ドイツ外務省のイニシアチブで 2008 年にはじまった国際交流プロジェクトで, 中等教育機関を中心とする世界中の PASCH 認定校約 1000 校をネットワークでつなぎ, ドイツとドイツ語についての関心を青少年層に抱いてもらうことを目的としている。日本の PASCH 認定校は, 加盟順に, 木更津工業高等専門学校 (2008 年 12 月), 獨協中学校・高等学校 (2009 年 9 月), 早稲田大学高等学院 (2009 年 9 月), 東京都立北園高等学校 (2010 年 1 月) の 4 校である。これらの 4 校では, PASCH 加盟後, ドイツ外務省と Goethe-Institut の支援によって, ドイツ語力を向上させるためのさまざまなプログラムを実施してきた。具体的には, ①夏期ドイツ研修派遣 (3 週間), ②アジア国際ドイツ語キャンプ派遣, ③CEFR A1/A2 対応試験の実施, ④ドイツ企業・ドイツ大使館訪問, ⑤PASCH 新聞の発行, などである。PASCH 校では, 以前から中等教育レベルでドイツ語の授業を実施していたが, PASCH 加盟後, ドイツ語学習のモチベーションは格段に高まっている。日本のドイツ語教育界では, 近年, ドイツ語の授業時間数や学習者の減少, ひいてはドイツ語授業の必要性の有無についても話題となっているが, PASCH 校においては逆にドイツ語学習が活発化している。こうした現状について, 本発表を通じて広く知ってもらい, 中等教育から高等教育への橋渡しの時期におけるドイツ語教育のあり方について, 参加者と広く意見交換を行いたい。

ブース発表 4 (16:00~17:30)

H 会場 (1302 教室)

「オリジナル漫才 (MANZAI)」の作成課題を取り入れたドイツ語授業の試み —実践報告と今後の課題

平松 智久

「ドイツ語教育・学習者の現状に関する調査 中間報告書 教育機関編 (2013 年 5 月)」(ドイツ語教育・学習者の現状に関する調査委員会編)によると, 日本の大学における第二外国語としてのドイツ語授業は, 初級の学習者が全体の 9 割以上を占め (60 時間未満 72%, 120 時間未満 20%), 学習内容は「総合学習」「文法」「会話」が中心である。独語独文系の学科・専攻以外では中級にまで進む学生が少数であるため, 学習者の多くが初級の受動的な学習に終わっているのが現状ではなかろうか。そのような状況を打破するために, 発表者は 2007 年度からドイツ語による「オリジナル漫才 (MANZAI)」の作成課題を取

り入れた授業を試みてきた。本発表では具体的に複数の実践例を報告するとともに、その教授法の可能性、問題点、今後の課題を明らかにする。

なお、ここで MANZAI とは、2～3 名のグループが自作・自演するドイツ語笑劇の発表形式を表す。発表のために学習者はあらかじめ創作台本をドイツ語で作文し、本番では即興も入れて積極的に演じる。「笑い」は話し手の発言内容が「伝わった」という明白な証にほかならない。この課題に取り組むことによって演者は、例文の理解と機械的な暗記に留まらず、生きたドイツ語を実際に使う感覚を養えるだろう。また他の学習者も、発表を鑑賞しながら受容能力を高められる。ドイツ語を「学ぶ」だけでなく「使って楽しむ」ことで学習者がモチベーションを高められれば、学習を続けるための意欲を喚起する一つの方策になるのではないだろうか。

ブース発表 5 (16:00～17:30)

I 会場 (1301 教室)

Dynamic Play Learning System:

Über die Einführung von Spielen in deutschen Konversationskurse

Asuka Yamazaki

Dieser Workshop berichtet über die Motivationssteigerung der Teilnehmer sowie den Lerneffekt durch die Einrichtung der Spielumgebung in fremdsprachigen Konversationskursen. Dies ist ein Versuch, die zwei „Attraktors“ in einer neunzigminütigen Unterrichtsstunde aufzustellen und den Unterrichtsraum unter der geometrischen Konstruktion „Dynamic Play Learning System“ zu organisieren. Dabei werden nicht nur die Spiele, auf die man bisher nicht als Lehrmittel für den Fremdsprachenunterricht beachtet hat, sondern auch die von der Referentin selbst entwickelten Kommunikationsspiele als ein Attrakter für den Unterricht durchgeführt, um sowohl das Sprachgefühl u. -kenntnis zu steigern, als auch den gesamten Unterrichtsraum zu aktivieren.

Attraktor ist der Begriff als Einzugselement im Phasenraum des dynamischen Systems und bedeutet auch eine Menge, zu der die Bewegung schließlich gelangt. Um die Teilnehmer in den dynamischen und aufwendigen Sprachenlernprozess einzubringen, werden die unterschiedlich angefertigte Spielprodukte oder selbstgemachte Spiele eingeführt, wie die deutschen und japanischen Erziehungsspielzeuge, die Verkleidungs-Partyspiele, die traditionell-kulturellen japanischen Spiele so wie die Glücksspiele. Die Präsentation wird in Form von Workshop im kleinen Kreis gegeben. Nach der Erklärung zum neuen Konzept erleben die Teilnehmer die Spiele mit Freude zusammen. Schließlich wird ein Meinungsaustausch im Bezug auf die bisherigen Spielkonzepte vorgenommen.

第2日 5月31日(日)

シンポジウム IV (10:00~13:00)

A 会場 (1101 教室)

文学はどこに向かうのか — ドイツ語圏越境文学の諸相と可能性

Wohin geht die Literatur? — Aspekte und Möglichkeiten der transnationalen Literatur im deutschsprachigen Raum

司会：土屋 勝彦

異文化間文学、移民・亡命文学、他者の文学、多言語が響き合うオムニフォンの文学、母語から脱出したエクソフォニー文学、脱領域文学、マイナー文学などと呼称される越境的な文学は、現代世界文学の重要な一角を占めている。植民地時代よりクレオール文学が定着している英語圏や仏語圏に限らず、ドイツ語圏においても、ロマン派のシャミッソーからリルケ、カフカ、カネッティ、ツェランなど、広義の意味で多言語性や越境性を有する作家が登場してきた。本シンポジウムでは、ドイツ語圏現代文学におけるこうした越境の諸相を取り上げ、インターカルチュラルなあり方やコスモポリタンな論理の創造を再検討し、その文学的可能性を問い直す。越境文学を「境界を越え出てゆく文学」と定義すれば、すべての文学事象に当てはまる根源的な特質だと考えることもできる。つまり優れた文学作品が多少とも核心に持つ特徴として、「言語化しえないものの言語化」ないしは「不可視のものの可視化」、さらには神話的ないし民俗学的始原の表象やポリフォニー的多極構造が見られるとすれば、それは閉じた体系に分節化する言語表現という境界を打破し、新たな表現形式を創造する比類なき一回性と普遍性を同時に志向する文学的想像力の所産であるとも考えられる。その意味では、言語や民族、ナショナリズム、ジェンダー、階級、モノロジック性、アイデンティティ探求、ミメシス的世界像といった、合理的な時空の統一を前提とする近代主義的文学観の境界を乗り越えようとした現代文学の多くが、文字通り「越境文学」の実験場となり、前衛的革新的文学への転回を体現してきたのである。しかし、今回取り上げる作家たちは、トルコ系ドイツ語作家・映画監督たち、チェコ出身のドイツ語作家モニーコヴァー、イタリア国籍のオーストリア作家ザビーネ・グルーバー、そして日独語作家の多和田葉子という、ドイツ語圏「国民文学」の周縁に位置する作家たちである。トルコ系ドイツ語作家・映画監督は「移民文学」の大きな位置を占めており、モニーコヴァーはカフカの影響を受け、東西冷戦時代にチェコから亡命・越境した作家であり、グルーバーは南チロルの複雑な歴史性を踏まえた越境的な作家であり、多和田は自由意志によりドイツ語を創作言語に選んだ越境作家であ

る。ドイツ語圏現代文学において、こうした越境文学の諸相を検討し、文学表現の可能性と意義を討議することにより、広く現代文学および世界文学の今後のゆくえを考える一助としたい。なお、越境文学に関してドイツでは1990年代以降とくに主題として取り上げられており論集も刊行されてきたが、日本では、個別発表はあったものの、これまでシンポジウムの形で総合的に討議する機会はなかったゆえに、活発な議論になるよう願っている。

1. 欧州連合拡大過程の中の移民文学・映画

ー トルコ系移民二世作家セリム・エツドガンとファティ・アキンの近年の作品における〈越境〉の諸相

林寄 伸二

移民二世以降の作家たちの文学・映画も移民文学・映画に含めるならば、トルコ系移民文学・映画のあり方が総じて90年代から変化し、ドイツで育った二世以降の活躍により多様化してきたことはすでに指摘されている。しかし、トルコがEU加盟候補国となるゼロ年代になると、二世作家によるトルコ回帰ともとれる傾向が見られた。

本発表では、このトルコ回帰傾向を示した移民二世作家 Selim Özdoğan のその後の長編小説（『Zwischen zwei Träumen』2009、『Heimatstraße 53』2011、『DZ』2013）と Fatih Akin の最新映画（『The Cut』2014）を取り上げ、それらの〈越境〉の諸相を「多様性における統一」というモットーを掲げる欧州連合（EU）の拡大過程を背景にして考察する。

これらのトルコ系移民文学・映画においては、ゼロ年代のトルコ回帰傾向の継続がその後も部分的に確認される一方で、トルコの地域性が脱色された〈越境〉の諸相（自と他の夢の混交、ヨーロッパからの移住、インターネット世界の多文化性と越境性等）も観察される。このような多様化は、トルコ系移民二世作家たちが一方でトルコというルーツを意識しながら、他方で越境を生きるヨーロッパ人として創作しているから起ると考えられる。また、EU拡大が領域内の言語・文化・国家等の確かな境界を前提として成り立つ移民文学・映画の成立条件や特質を変容させ得るとすれば、加盟候補国トルコをルーツにもつトルコ系移民作家の近年の作品の多様なあり方はその変容過程を象徴的に示してもいる。

2. カフカからモニーコヴァーへ

ー プラハ発ふたつのマイナー文学

島田 淳子

本発表では、プラハの春事件以後西ドイツに亡命しドイツ語で文学創作を始め

たチェコ人作家リブシェ・モニーコヴァー Libuše Moníková の処女作『加害』*Eine Schädigung* (1981) と第二作『亡き王女のためのパヴァーヌ』*Pavane für eine verstorbene Infantin* (1983) を内容的・構造的に分析し、このマイナー文学的作家の成長を越境性という観点から考察する。モニーコヴァーは『加害』の執筆を通してチェコ語からドイツ語への言語的越境を果たしたが、68年のソ連軍事介入を暗示するこの作品には越境的モチーフは現れず、文体や構成も彼女の同郷の作家カフカの模倣に留まっている。一方亡命チェコ人が作家として自立するまでを描いた『パヴァーヌ』ではまさしく越境と文学創作が主題化されており、チェコ語を含めた外国語表現の挿入や映画及び他の文学作品からの引用、断片的なテキストの並列など前作では見られなかった実験的な試みがなされている。こうした表現は、彼女の代表作『ファサード』*Die Fassade* (1987) における、国、言語、ジャンルを横断するダイナミックな世界観を作り出すのに重要な役割を果たした。モニーコヴァーの文体形成の過程を示すことで、自身の越境性を否応にも意識せざるを得ない亡命作家の状況は、言語表現の限界を超えていくことを目的とする文学創作においてむしろポジティブな意味を持つことを証明する。

3. 越境する盲点としての南チロルと身体

— Sabine Gruber における隠喩の越境的連携について

眞鍋 正紀

本発表は、南チロル出身の詩人そして小説家 Sabine Gruber の主要な作品 (*Aushäusige, Die Zumutung, Über Nacht, Stillbach oder Die Sehnsucht und Zu Ende gebaut ist nie*) を取り上げ、同作家がいかに「越境」のモチーフをさまざまな形で変奏を加えて作品のなかへ組み込んでいるか、その多様性と意義について考察する。個人の自己同一性の境界や、女性と男性の境界、南チロル出身者というマイノリティ性、さらに二十世紀のナショナリズムに翻弄された南チロルの歴史に由来する多言語性が、さまざまな隠喩や作品構築のありかたに現れている。そのさい「越境」というモチーフがいかに多産であり、かつ、痛みと死を併発するものであるかを示したい。主眼に置くのは、複数の作品にまたがって現れる隠喩の連携と布置の分析だ。「浮気」、「失樂園 (故郷からの追放)」、「放浪」、「傷」、「癌」、「臓器移植」、「穴」、「空所」、「雲 (視界を遮り、空想のキャンバスとなる)」、「抜け道」、「喪失」などの隠喩が、小説や詩を横断すると同時に、言語間や登場人物のパースペクテヴを横断して登場する。そのような隠喩のネットワークが読者の意識空間に働きかけて、「越境」を含む特定のイメージ群を伝達している機制について考察する。

4. 「越境文学」を再考する

— 多和田葉子の *Mammalia in Babel* と『動物たちのバベル』

越川 瑛理

本発表で取り上げる多和田葉子は、日本語とドイツ語で執筆活動を行う作家であり、母語と獲得言語とのあいだで絶えず顕在化する言語（間）の問題に直面しながら言語実践を行う作家である。本発表は、彼女の実践が既存の各国文学研究の領域を踏み越え、新たな研究の視座を要請することに応答しようとするものである。本発表で取り扱う作品は、彼女によって二言語で執筆され対応し合う戯曲 *Mammalia in Babel*（ドイツ語:2013）、『動物たちのバベル』（日本語:2013）である。この戯曲においては「翻訳」にまつわる諸相を見て取ることができる。すなわち本戯曲において、多和田の二言語執筆ないしは「自己翻訳」という翻訳の実践的問題が横たわる一方で、「翻訳」そのものが戯曲内に登場する主題の一つとして前景化されているのである。これらの前提をふまえ、日本語版とドイツ語版の表題にも含まれる「バベル」という言語の混乱に関連付けられる鍵概念が、戯曲内でどのような役割を担うかを考察し、言語の混乱の引き金となる言語遊戯がいかに翻訳の諸問題と接続していくかを検証する。その上で、多和田が主題化させる翻訳とはデリダの *Des Tours de Babel* やベンヤミンの *Die Aufgabe des Übersetzers* といった論考と比較して始めて明らかとなるような行為であることを考察する。本発表はこれらの分析を通じて、多和田の言語実践が、越境文学における作家の営為として重要な契機となる言語の枠組みの不断の更新を担うものであることを明らかにする。

シンポジウム V (10:00~13:00)

B 会場 (1002 教室)

R・シュトラウスのオペラ作品における音楽と文学の関係性を読み解く

Ein Versuch zur Entschlüsselung des Verhältnisses zwischen Musik und Literatur bei den Opernwerken von Richard Strauss

司会：野口 方子

コメンテーター：光野 正幸

オペラは単に音楽を伴うというだけではなく、その音楽は常に圧倒的な優位性を示す芸術である。また同時に、文学作品を典拠とする場合が多く、リブレットというテキストの存在が、音楽作品としても文学作品としても単体で扱うことを難しくしている。つまり確固とした複合芸術であるが故に、一つの研究分野においてのみ扱うことが困難なジャンルであり、とりわけ精緻なリブレットに、洗練された音楽の書かれた R. シュトラウス作品は、ドイツ文学史と音楽史の両者において、確実に一つの頂点を築いている。そこで本シンポジウムでは、シュトラウスとホフマンスタールやツヴァイクが共同

作業をしたように、我々研究の徒もドイツ文学・演劇と音楽に属する者が互いに協力し、「オペラ」という、芸術における究極の作品形態に対して新鮮な論考を提示することによって、各分野の専門家による多面的分析の有用性を示す。

具体的には、(1) 文学テキストと演劇・舞踊・音楽との関係(2) 小説とリブレットにおける人物造型・配置の対照(3) ホフマンスタールやツヴァイクとの共同作業およびそれ以前・以後の創作特徴の概説と、シュトラウス・オペラとヴァーグナー・オペラとの関連性／相違点(4) 言葉(歌詞)の解釈と、それを歌という表現に昇華させるための具体的な取り組みについて、各登壇者より報告する。

第1発表者の北川は《エレクトラ》を採り上げ、幕切れの沈黙に注目し、演劇という側面を視野に入れつつ、文学テキストと舞踊、沈黙、そして音楽との関係を考察する。第2発表者の野口は《アラベラ》を採り上げ、散文作品として発表されていた《ルツィドール》がオペラに翻案されたことで、登場人物の性格や配置がいかに変化したかを検証し、その共同作業の過程がホフマンスタール死後のシュトラウスのオペラ創作にどのように影響を及ぼしたと考え得るか言及する。第3発表者の広瀬は、ホフマンスタールとツヴァイクという二人の文豪との共同作業が与えた影響を中心に、それ以前と以降の三つの区分に分けて音楽史の見地から考察し、かつシュトラウスがオペラ作曲技法においてヴァーグナーから引き継いだものをいかに時代に対応させようとしたかという視点に立ち、シュトラウスのオペラ創作の意義を再検証する。そして第4発表者の望月は、実演に携わる表現者としての立場から、歌詞(テキスト)の解釈とそれによって微妙に変化する表現としての発音と、音楽たる「歌」との関係性について検証する。北川が演劇面、野口が文学面、広瀬が音楽学の面、そして望月が声楽家として演奏の面から、それぞれの立場で語ることで、言葉と音楽との関係性を立体的に考察する。

このように、演劇・文学・音楽・演奏という四つの側面から検証することで、研究対象としてオペラの持つ奥深さに光を当て、多面的視点の重要性を示すことが本シンポジウムの目的である。

1. »schweigen und tanzen!« — 《エレクトラ》の幕切れについての一考察

北川 千香子

『エレクトラ』は演劇改革の精神から生まれた作品である。なかでも、主人公の最後の台詞 »schweigen und tanzen« に一体化される沈黙と舞踊＝身体性は、ともに20世紀初頭における芸術の動向を象徴している。ホフマンスタールがこの戯曲の着想を得たのは1901年、初演は1903年である。その間には『チャンドス卿の手紙』が執筆されており、この中で作家が提起した言語の危機と新たな可能性を巡る問題は『エレクトラ』にも刻印されている。また、幕切れの狂乱の舞はギリシア演劇を意識したもののだが、底本であるソフォクレス版にはない、全く新しい性格を帯びている。演劇版は演出家マックス・ラインハルトとの協働で初演された。両者に共通していたのは、演劇本来の生命力をもった、新たな舞台芸術への志向であった。

こうした演劇改革の意識を、R. シュトラウスはオペラという分野で共有していた。オペラ版(1909年初演)では特に、音楽の身振り(Gestus)がエレクトラの台詞を表象し、音響によって特有の身体性を獲得している。本発表では、《エレクトラ》の幕切れの場面を手がかりに、戯曲とオペラにおいて、新たな演劇への志向がどのように具現化されているかを考察する。さらに、ホフマンスタールの台本には、幕切れのト書きに「Stille」と記されているが、この「余白」がオペラ版の独自性を生み出していることを明らかにしたい。

2. 《ルツイドール》から《アラベラ》へ — 小説がいかにかにオペラという表象芸術になったか

野口 方子

リヒャルト・シュトラウスとフーゴー・フォン・ホフマンスタールの最後の共同作業作品となったオペラ《アラベラ》は、1910年に書かれた小説《ルツイドール》が元になっている。この《ルツイドール》には「書かれざる喜劇の登場人物たち」という副題がついていることから判るように、当初は喜劇として構想されていた。結果として散文作品として発表されたわけだが、音楽が重要な位置を占めるオペラというジャンルの題材として改めて採り上げられた際に、小説の登場人物たちはどのような人物造型になったのか。変わった部分／変わらなかった部分を検証することにより、小説がいかにかにオペラになったかを考察する。

《アラベラ》は、《ばらの騎士》以来の会話劇的な側面を持った作品の流れを汲み、《ナクソス島のアリアドネ》1916年版の序幕や《インテルメッツォ》を経て、この《アラベラ》でひとつの頂点を迎えるはずだった。しかし、ホフマンスタールの急死により二人の共同作業は突然終わりを告げ、第二幕以降は、ほとんど打ち合わせのないまま遺されたリブレットに曲が付けられたため、推敲不足による冗長さも否めず、現在でも慣習的カットを施された版が上演されることが多いという現状がある。この発表では、先行研究を紹介しつつ、慣習的カットが原因となり主人公アラベラの内的性格が解りづらくなってしまった点を明らかにし、そこを手掛かりに、妹のズデンカ(＝ルツイドール)に代わり、アラベラがこのオペラのヒロインとして、どのように据えられたのかを考察する。さらに「抒情喜劇」と、ホフマンスタールが副題に込めた意図が、シュトラウスのオペラにおける遺言である《カプリッチョ》にまで音楽的に受け継がれ、展開した可能性を指摘する。

3. シュトラウス・オペラ作品の歴史的変遷と音楽的概観

広瀬 大介

シュトラウスのオペラ創作は、最初期の『グントラム』(1894、以下括弧は初演年)から最晩年の『カプリッチョ』(1942)まで、計15作、半世紀の長きに及ぶ。これまでの研

究では、その音楽史的意義は『ばらの騎士』までの前衛的作曲手法とそれ以降の同工異曲、というステレオタイプで説明されることが多かった。だが、シュトラウスの没後 50 年となる 1999 年を境として、それ以降の研究では、こうした進歩史観的音楽史への反省から、新たな視点でシュトラウスのオペラ創作活動全体を定義し直そうとする風潮が主流となっている。

本発表では重要な先行研究を紹介しつつ、その創作と特徴を『グントラム』から『エレクトラ』(1909) (ホフマンスタールとの共同期以前) まで、『ばらの騎士』(1911) から『アラベラ』(1933) (ホフマンスタールとの共同期) まで、『無口な女』(1935) から『カプリッチョ』(ツヴァイクとの共同期、およびそれ以後) まで、時代区分に分割して概説することを試みる(この時代区分は順に帝政ドイツ期、ヴァイマル共和国期、第三帝国期と呼ぶことも可能だろう)。そのうえで、ヴァーグナーから引き継いだオーケストレーション、声楽、ライトモチーフなどにおける様式上の変遷が、むしろ 20 世紀前半の音楽界全体を視野に収めつつ、その変化にもある程度対応しようとしたものだったことをあきらかにしたい。

4. 歌唱芸術における、音楽と歌詞との関係性について

—声楽家から文学への提言

望月 哲也

私は声楽家として、我が国で唯一、年間を通してオペラ劇場として稼働している国立劇場にて、リヒャルト・シュトラウスやヴァーグナーなどのドイツオペラで多くの舞台に携わっている。また併せて、ドイツ歌曲を中心としたリサイタルも、年に一度の割合で開催している。その経験に基づき、音楽と歌詞との関係性について詳述する。

演奏する上において、最も重要視していることは、「美しい言葉を、美しい音楽にのせて」というモットーであり、それを真摯に探求し辿りついた先が、ドイツ詩とドイツ語圏の作曲家の作品であったということを、まず強調しておきたい。我が国においては、ドイツ語で歌われる作品を聴衆に伝えるには大変な困難を伴い、先達の声楽家も長年にわたり苦心し考えてきたのであるが、どのように演奏したら内容を伝えられるのか？届けられるのか？ということは、日々新たな問題として立ちはだかるのである。言うまでもなく、ドイツ語の言葉・単語には一つの語の中に様々な意味があり、またその言い方一つで、人が受け取る印象の幅が多様になる。その言葉の細かなニュアンスは、ただ朗読して伝える時よりも、作曲家が詩から読みとった絶妙な音楽が伴うことにより、その情景を鮮やかに、印象的に浮き立たせ、より一層、言葉に精気を吹き込む。この言葉と音楽との出会い、それを時代を超越して伝えることこそが、歌唱芸術の真髄である。

今回の発表では、いくつかの言葉を例として挙げ、例えばシューベルトはこのように、シュトラウスではこのような解釈で演奏を構成していることを、実演を交えつつ「音楽と文学との関係性」の実際を、現場に立つ者としてお伝えしたい。

シンポジウム VI (10:00~13:00)

C 会場 (1001 教室)

ドイツ語における有生性
Belebtheit im Deutschen

司会：清野 智昭・時田 伊津子

事象の言語化においては言語主体である人間の認知プロセスが決定的な役割を果たすが、その中でも事象に関わる項の「有生性」は言語化の際にどのような影響を及ぼすのだろうか。本シンポジウムの目的は、ドイツ語を対象に、言語主体による「有生性」との認知と言語化のプロセスを明らかにし、日本語の事例と比較対照することである。

有生性は Silverstein (1976)以来、有生性の階層 (animacy hierarchy) として知られている。日本語でも自然な語順の決定要因の1つとされている (角田 2009)。また、雑誌 *Lingua* 118 (2008)では言語類型論の枠組みで有生性についての実証研究の特集を組んでいる。

ドイツ語においては、Engel (1970)の基本語順を小規模のコーパスで実証した Hoberg (1981)により、有生性はある程度の関与性を持つとされたが、その後の研究で有生性が注目されることは少なかった。Kempen and Harbusch (2005)、Kempen and Harbusch (2008)はコーパスから収集した事例の項の順序を機械的に処理して有生性の関与を認めているが、調査は項の格や代名詞化など表層的な範囲に留まり、有生性と不可分な意味役割や、有生性に影響を受ける構文の意味解釈等を含む分析が行われている訳ではない。また特定の構文の項の有生性については VALBU (2004)などの動詞の結合価を詳細に記述した辞書に個々の動詞の特性として記載があるものの、体系的に記述されていない。

そこで本シンポジウムは、3種類の構文 (心理表現構文、使役構文、3項動詞構文) の使用実態分析と語順分析という2つの視点からアプローチを図る。特定の構文の中で有生性の選択が意味解釈や語順に及ぼす影響を明らかにし、特に心理表現構文においてドイツ語と日本語の対照研究の結果を報告する。あわせてドイツ語の事例についてコーパス調査を用いて統計的に有生性の影響度を求める。その結果をもとに、事象の言語化において有生性が構文に及ぼす個別言語的、言語普遍的影響を探る。

第1発表者の室井と第2発表者の清野は心理表現構文を扱う。そのうち、室井は感情形容詞に注目し、主観的である感情がドイツ語でどのように表される

かを報告する。第2発表者の清野は、ドイツ語の心理動詞構文において日本語の感情形容詞に見られるのと同様の主語の人称制限が見られるかを報告する。第3報告者のカンは、使役構文において項の有生性がどのような役割を持つかを報告する。第4発表者の時田は、3項動詞構文で項の有生性が語順にどのような影響を与えるかについて報告する。

これにより、ドイツ語の構文において有生性が関与する現象を総合的に扱い、ドイツ語構文研究の1つの方向性を確立したい。

1. 感情形容詞における構文 —心理動詞との関連において—

室井 禎之

ドイツ語感情形容詞は以下の5種類の構文で出現する：

- 1) y_{nom} COP x_{dat} A (Das ist mir angenehm.)
- 2) x_{dat} COP A (Mir ist kalt.)
- 3) x_{dat} COP P y A (Mir ist bange um ihn.)
- 4) x_{nom} COP P y A (Sie ist über die Nachricht froh.)
- 5) x_{nom} COP A (Ich bin müde.)

x : 経験者、y : 刺激、A : 形容詞、COP : コブラ、P : 前置詞

構文1では感情をもたらす刺激が主格、経験者が与格で現れる。外的な要因の原因としての刺激に焦点が当たり、経験者の内的要因は従。**構文2**は感覚を表す形容詞に見られる。本来属性形容詞であるが、非人称構文では身体感覚を表す表現となる。**構文3**は与格経験者と前置詞句刺激を伴う非人称構文で感情を表す。**構文4**は主格経験者と前置詞句刺激を伴うもので、ここに現れる形容詞は主として感情を表す。**構文5**に現れる形容詞は主格経験者のみを伴い、感情を表す。またこれらの構文は感覚・感情を表す動詞のそれとの並行関係も認められる。

これらの観察から、次のような結論が導き出される：1)感情・感覚は刺激と経験者との関係から生じ、そのどちらにどれだけ焦点を当てるかによってより属性表現に近いものから純粋な心理状態表現への段階的移行を示す。2)感情形容詞と類似の構文を取る動詞との相違および類似は意味的に動機づけられている。3)有生性と経験者との関係について、本発表での観察を通してその位置づけが精密化され、有生性はスケールの捉えるべき特性であることが明らかになる。

2. ドイツ語心理動詞構文における主語の人称制限

清野 智昭

人称制限とは、「私は（*彼は）悲しい」のように述語によって主語の人称が制限される現象であり、多くの場合、この現象は他人の心理を直接伺い知ることができない（益岡 1997）、または、日本語では「語り」と「報告」の文体の差があるから（金水 1989）と説明される。これらの説明はドイツ語の心理表現にも本来当てはまるはずである。

本報告では、基本的な感情を表し、他動詞構文と再帰構文もしくは状態構文を持つドイツ語の5つの心理動詞（*ärgern*, *enttäuschen*, *freuen*, *interessieren*, *überraschen*）に関して収集した3000以上の用例の分析結果を報告する。用例は、20世紀の文学作品を集めた「文学コーパス」と、2010年度の新聞を集めた「新聞コーパス」から収集した。その結果、日本語より弱い形であるが、ドイツ語にも人称制限はあること、それは構文の選択として現れることを主張する。動詞によって多少の違いはあるが、総じて1人称は3人称と比べて他動詞構文の4格として実現されやすく（*Es freut mich* > *Es freut ihn*）、3人称は1人称に比べて、再帰構文の主語として実現されやすい（*Er freut sich* > *Ich freue mich*）。他動詞構文では、経験主は外的な力によって心理状態が変化することを表す。それに対し、再帰構文では主語は主体的に自分の心理状態をコントロール出来る状態にある。つまり、再帰構文で表される事象は外面的に観察可能であるのに対して、他動詞構文で表される事象は客観的に観察しにくい。この構文の特性が人称制限として表れてくると考えられる。

3. 無生物主語の使役構文について

カン・ミンギョン

本発表では分析的使役構文を取り上げる。とりわけ自動詞を含む[V lassen]および[zum V bringen]形式に対象を絞って、無生物主語使役構文の用いられ方に関する調査結果を示す。

人主語の典型的な使役構文の場合、動作主の何らかの関与があることは明らかだが、その関与の仕方は（文脈や文中の他の語句によって示されない限り）特定されないことが多い。それに対し無生物主語使役構文では、ある出来事を引き起こす要因が明示され、原因と結果の関係がはっきり表わされる特徴がある。

このような意味特性は[V lassen]と[zum V bringen]の使役構文の場合惹起（*Zustandbringen*）として捉えられるが、無生物主語構文の使用頻度は本動詞の意味特性によって大きく異なる。コーパス調査では、プロセスを含む出来事動詞（*Vorgangsverben*）において無生物主語構文が高頻度で観察されている。なお、同じ動詞を含む[V lassen]と[zum V bringen]では、無生物主語構文の使用頻度が両形式の意味的相違と関係しているケースがある。

また、無生物主語として現れる名詞は、自然現象や原因的事柄などの外的要

因から、人の感情や行為など動作主と部分全体の関係にあるものまでさまざまである。後者の無生物主語は人主語に近い部分があり、無生物主語における有生性もスケールの的に捉えることができる。

4. 3項動詞構文の語順における有生性

時田 伊津子

本発表では、主格（1格）、与格（3格）、対格（4格）を伴う3項動詞構文について、動詞別コーパス事例を用い、中域語順における有生性の関与を実証的に明らかにする。

1格と3格の名詞2項の間で生物>無生物の語順は必ずしも優勢ではなく、動作主的に捉えられる無生物1格は生物3格に先行する傾向がある。

3格と4格の名詞2項については、生物>無生物の語順が優勢な動詞とそうでない動詞がある。

(1) ..., dass die Eltern dem Kind keine Milch geben"...

(2) ..., dass der Meister das Bild zur Fertigstellung seinen Gehilfen überließ ...

前者の生物3格は受容者を表し、後者の生物3格は行為の遂行が期待される動作主的な意味役割も表す。同じ生物3格でも担う意味役割が異なるために語順傾向が異なると考えられる。有生性を意味役割の上位概念として定義する研究もあるが、語順決定要因として有生性と意味役割を区別する必要があると仮定できる。

この仮定に基づくと、1格と3格を伴う2項動詞構文における語順も説明できる。生物3格が動詞の表す出来事に直接関わらない傍観者的な意味役割を表す動詞では生物>無生物の語順が優勢で、生物3格が所有者を表す動詞では無生物>生物の語順が優勢である。

上記の生物3格の意味役割の相違は、出来事に対する生物（人間）の関与の相違でもあり、関与が小さければ出来事の対象となる無生物の項より前に置かれ、関与が大きければ無生物の項より後ろに置かれる傾向が確認される。

口頭発表: 文学3 (10:00~12:35)

D会場 (8501教室)

司会: 福間 具子・富岡 悦子

1. オットー・バジルの詩集『天秤座』における詩的プログラム

日名 淳裕

オットー・バジル (1901-1983) は今日もつばら雑誌『プラーン』の編集者とし

て知られている。このような紹介は、彼の雑誌でデビューした詩人たち（アイヒンガー、ツェラン、フリート、マイレッカーなど）の文学史的評価が進むにつれて繰り返されてきた。確かに占領期に無名の作家を世に出した彼の功績は疑いようがない。しかし彼に対するこの讃嘆こそがバジルの文学作品を後景へと追いやる一因となってきた。

バジルは生前に五冊の詩集を出版している。壮年を過ぎて記者的仕事が主流となった後も詩作は続き、発表の機会が探られた。クルト・ピントゥスに宛てて述べているように文芸こそが彼の本源であり、その中でも特別な位置を占めるものが詩であった。

本発表は未だ十分に顧みられていないバジルの詩作品に注目する。その際に鍵となるのが1945年に出版された詩集『天秤座 (Sternbild der Waage)』である。巻末注によると、天秤座を模して二部からなるこの詩集はもともと1930年を境として区分されていたが、新たに作品が加えられることで二つの境界は薄らいでいった。このバジルによる説明は、同じく1945年に復刊された『プラーン』で行われたオーストリア詩史再編纂を検討する際にも有効だろう。第三帝国期に排除された外国文学や表現主義の再評価と亡命詩人らの紹介は雑誌の思想的両輪となったが、それは好んで指摘される雑誌の政治的傾向によっては十分に説明されない。むしろ『天秤座』を成立させた詩的プログラムがここでも大きな役割を果たしていたのだ。

2. H.H.ヤーンにおける原作と改作の問題

北村 優太

ハンス・ヘニー・ヤーンには、同一題材の有名な作品がすでに存在している「本歌どり」ともいうべき作品系列がある。この発表では、先行作品を踏まえて制作されたこれら諸作品を、元となった作品と比較し、それぞれの例にうかがわれる改作の方向性を検討することによって、ヤーン独自の方法論を剔出することをめざす。

戯曲『リチャード三世の戴冠』はシェイクスピアの『リチャード三世』に対する対抗意識から制作されたとされるが、シェイクスピアの作品には稀薄な同性愛要素が主要なモチーフとして大きくとりあげられ、さらに登場人物たちの長大なモノログのために上演困難な作品になっている。別の戯曲『メデア』では、エウリピデス以来の先行諸作品とはことなり、メデアが文学史上はじめて明確に黒人として描かれている。これら2作品からうかがわれるのは、ヤーンの改作においては、①マイノリティの前景化、②文学上のジャンルそのものの問い直し、といった作業が行なわれているらしい、ということだ。発表では、これらの傾向を作品のテキストから跡づけ、ヤーンにおける〈原作＝オリジナル〉の再検討という問題について論じる。そのさい、戯曲『トマス・チャタートン』、ならびにチャタートンをめぐるヤーンのエッセイが、この問題について

重大な示唆をあたえてくれるはずだ。

3. デーブリーンの死生観—『ハムレットあるいは長き夜が終わる』で描かれる「新しい人生」

時田 郁子

アルフレート・デーブリーン（1878-1957）最後の長編小説『ハムレットあるいは長き夜が終わる』（1956）は、若きイギリス兵エドワードがアジア戦線で片足を失い帰還してからトラウマを克服するまでを描き、主人公が新しい人間になるというデーブリーン文学に馴染みの図式を踏襲するが、登場人物たちの語る物語が主人公の再生を促すという特徴を持つ。そのため、先行研究では筋と挿入される物語の関係が考察され、本発表はそれらを踏まえて、主人公が物語を受容し思索を深める様を考察し、彼が手に入れるという「新しい人生」の解明を目指す。エドワードは、死の淵から生還して、故郷、家族、自分に対し懐疑的になり、自分が片足を失った理由にして戦争を引き起こした責任を周囲の大人たちに追求する。彼は子供のように振る舞い、杖を突いて家中を歩き回り人々に論争を挑むが、その姿は生と死の境界に立つ魔術的跛者を連想させる。魔術的とも言える能力は、彼が「誠実さ（Redlichkeit）」というキルケゴールの思想を拠り所にして、周囲の人々と彼らの物語を検分する場面で発揮され、彼は人々を混乱に巻き込み、それにより意図せずして、戦争体験を経て崩壊した自我を再構築する。彼は、次第に新プラトン主義的な愛を理解し、「誠実さ」は責任を取る態度であると悟り、他人に頼らず、現状を引き受け、世間や自然との繋がりを自覚して、「新しい人生」を手に入れるのである。

4. 理解は生起する—ガダマーとド・マンにおける出来事概念

林 英哉

解釈学のガダマーと脱構築のド・マンは、ほぼ同時期に活躍したにもかかわらず、これまで結びつけて論じられることはほとんどなかった。とはいえ、二人はともにハイデガーの解釈学から強く影響を受け、また理解を生起する出来事として捉えたという共通点を持っている。ハイデガーの解釈学の特徴は、それまで否定的に捉えられてきた解釈の循環構造を、時間性の観点から、理解における必然的構造として捉え直したことであった。ガダマーはそれを推し進め、啓蒙主義によって完全否定された先入見こそが、実は我々の理解を可能にさせていると主張した。先入見は解釈の地平であり、互いに異なった、テキストの地平と解釈者の地平が融合することによってこそ、理解は可能になる。すなわちこのとき、「地平の融合」としての理解が出来事として生起しているのである。一方ド・マンは、テキストと理解とが完全に一致することはありえないと考え、

ハイデガーをさらに読み替えて、はじめと終わりが結びつく循環構造ではなく、時間性のゆえにズレが存在する螺旋構造を主張した。そして、ヘルダリンの「真なるものは生起する」という詩句を引きつつ、物質的な出来事としての理解の生起について語る。ド・マンの言う出来事とは、不可逆的に生起した、ズレや断絶を前提とするものであり、互いに決して融合することはない。そして、ガダマーとド・マン双方の議論の核心には言語の問題があり、本発表ではそれを導きの糸とする。

口頭発表：語学2 (10:40~12:35)

E 会場 (8502 教室)

司会：黒田 享・Maria Gabriela Schmidt

1. 会話の理解・不理解と視線配布の関係 — 日独比較分析 —

白井 宏美

視線配布と文化差については、古くから研究がなされており、言語文化による視線配布のパターンの違いが、意図せぬ誤解や偏見の原因になるということが分かっている (Kochman 1981, Greenbaum 1985 など)。昨今では、どのようなタイミングで視線をそらすか (吉川・石黒 2006) など、詳細な分析が行われている。また、会話における理解・不理解に関する研究は、Deppermann/Schmitt (2009) や河原・林・高梨 (2013) などがある。しかし、視線配布と会話の理解・不理解の関係を調べた日独比較分析はまだない。

そこで、本研究では、日本語母語話者ペアの会話とドイツ語母語話者ペアの会話を収録し、会話の理解・不理解と視線配布の関係について、日独比較分析を行った。

その結果、(1) 日独共通点として、聞き手個人の行動様式に加え、相手 (説明者) との相互行為により、聞き手の理解・不理解の表現方法ができあがり、2人のなかで共有されていく (インタラクションの経過において習得され、ペアの間で認知されていく) ことが分かった。リソースとしては、視線だけではなく、頷き、あいづち、微笑み、笑いなどもある。(2) 日独相違点として、表情の種類と表出の仕方が違っている。たとえば、ドイツ語母語話者は、複数のリソースを時系列に用いる。発表では、どのように違っているか、分析ソフト ELAN を用いて、具体的に映像で示したい。

2. 聞き手の存在は、ドイツ語の心態詞と日本語の終助詞の出現に影響するか？

岡本 順治

ドイツ語の心態詞(*Modalpartikeln*)も日本語の終助詞も、話し手（達）が先行文脈において語ること、発話状況、話し手と話し相手が想定する共有知識をリソースとして作られる心的態度に関係する。ただし、その心的態度は、特定の種類の心態詞／終助詞によって向けられる方向（話し相手、自分の発話、話し相手の発話、話し相手の行動など）が異なるが、＜発話状況において聞き手が存在することを前提に発せられる＞、と考えられる。

このテーゼを主張する根拠は、心態詞も終助詞も「訴え掛け機能」に関係しており、「訴えかけられる相手」なくして使われるとは考えにくいからである。これを実証するために、聞き手が発話状況にいる場合といない場合を人工的に作り、日本語とドイツ語でほぼ平行した発話産出実験を行った。

パイロット実験は2012年2月～3月にドイツ人被験者5人、日本人被験者5人を対象に行われ、本実験は2013年3月～5月にドイツ人被験者10名、日本人被験者10名を対象に行われた。その結果、(1)心態詞も終助詞も、その使用頻度や使用の仕方に個人差が大きいこと、(2)聞き手の存在は心態詞や終助詞の使用に影響を与えるケースが多いが、影響を受けない場合もあること、(3)今回の実験のやり方からして、心態詞を多く引き出すような環境作りに成功していない可能性が高いが、終助詞は多く出現すること、などが分かった。本発表では発話産出実験の概略と結果、さらなる実験的検証の可能性を議論する。

3. Das Plädoyer für den Konjunktiv als unverzichtbares Mittel im Gebot der stilistischen Abwechslung

Manshu Ide

Ausgehend vom Gebot der stilistischen Abwechslung im Deutschen sowie der Einbettung des Konjunktivs in die textkonstitutive Operation „Informationswiedergabe“ bezieht die vorliegende Analyse des Konjunktivs vier formale Varianten der Informationswiedergabe „*dass*-Nebensatz im Indikativ“, „Hauptsatz im Indikativ“, „Hauptsatz im Indikativ mit Anführungszeichen“ und „Hauptsatz im Konjunktiv“ auf die Positionen sowie die Formen der „Quellenangabe“, meistens Verben der Informationsmitteilung wie *sagen*, *meinen*, *berichten* u. ä., welche die textuelle Handlung „Informationswiedergabe“ signalisiert. Die Analyse ergibt eine gewisse Faustregel des Konjunktivgebrauchs in der journalistischen Textpraxis: Die formale Variante „Hauptsatz im Konjunktiv“ wird typischerweise durch eine andere „Quellenangabe“, die eigentlich einem ihm vorangehenden Satz zur Markierung der Informationswiedergabe dient, kenntlich gemacht, dass es sich noch weiter um die Informationswiedergabe handelt.

Eine „Doppelmarkierung“, im „*dass*-Nebensatz“ statt des Indikativs eines Konjunktivs zu bedienen, oder beim „Hauptsatz im Konjunktiv“ trotz der Möglichkeit eines

Konjunktiv I einen Konjunktiv II einzusetzen, lässt auf eine gewisse Schwankung bzw. Unsicherheit der grammatischen Handhabung des Konjunktivs schließen, ob der Konjunktiv I im *dass*-Nebensatz einen Abstand zur Wahrhaftigkeit der wiedergegebenen Information bekundet oder eine sinnlose Doppelmarkierung darstellt, genauso wie der Konjunktiv II trotz der Möglichkeit des Konjunktiv I im konjunktivischen Hauptsatz die Erkennung erschwert, ob er einen Abstand zur Wahrscheinlichkeit der wiedergegebenen Information meint oder eine unüberlegte Widerspiegelung des Gebrauchs des Konjunktiv II in mündlicher Rede, dass etliche ausgeprägte Formen des Konjunktiv II wie *hätte, wäre, würde; könnte, müsste* u. ä.; *ginge, gäbe, käme, ließe, hieße* u. ä. statt des Konjunktiv I auch für die Informationswiedergabe (sog. indirekte Rede) in der mündlichen Rede gang und gäbe sind. Diese Unsicherheit würde an dem System des Konjunktivs rütteln, weil ein rein formaler Usus ohne merklichen semantischen Unterschied den eigentlichen Mehrwert des Konjunktivs, die Haltung des Schreibers zur Wahrhaftigkeit bzw. der Wahrscheinlichkeit der wiedergegebenen Information zu differenzieren, verwischen würde.

口頭発表：ドイツ語教育 (10:40~12:35)

F 会場 (8701 教室)

司会：濱野 英己・Davide Orlando

1. Studienaufenthalte in Deutschland - "Was brauchen unsere Studierenden eigentlich?" Zur Implementierung adressatInnen gerechter Komponenten ins Programm

Martina Gunske von Kölln

Resümee:

Das japanische Kultusministerium erwartet, dass japanische Studierende vermehrt zum Studium ins Ausland gehen. Ferner sollen an den japanischen Universitäten Programme entwickelt werden, die sogenannte *グローバル化人財の育成* zum Ziel haben. Die Studierenden sollen zu *短期留学* Studienaufenthalten ins Ausland geschickt werden.

Dem stehen jedoch Zweifel entgegen, ob es ausreicht, Studierende zu einem Sprachkurs wegzuschicken, der von deutschen Universitäten organisiert und durchgeführt wird. Je nach Zielsetzung und Bedürfnissen der japanischen Studierenden sollten die Studieninhalte ausgerichtet werden.

Ferner liegen Studien wie von Kleppin vor, die belegen, dass Lernende, die lediglich ins Ausland zu einem Sprachkurs geschickt werden, nicht zwingend Lernfortschritte machen, die sie nicht auch in einem Sprachkurs in ihrem Herkunftsland erreichen

könnten. Das führt zu der Frage nach dem Sinn eines solchen kostspieligen Auslandsaufenthaltes. Daher ist die Forderung berechtigt, Aufenthalte zu organisieren, bei denen auf die konkreten Bedürfnisse der Lernenden eingegangen wird, und sie entsprechend betreut werden. Der Vortrag knüpft an diese Forderung an und stellt exemplarisch dar, wie bei der Erstellung eines neuen Curriculums an der Universität Fukushima dieser Forderung nachgekommen wird. Das dort entwickelte Programm wird zur Diskussion gestellt. Dabei soll auch erörtert werden, welche Bedeutung das Tandemlernen innehaben kann.

2. Was wissen meine Studenten und wovon kann ich ausgehen? - Studie zur Erfassung des Vorwissens von Lexik bei Studienanfängern in Bezug auf Deutsch nach Englisch in Japan

Frank Nickel

Erkennen japanische Studienanfänger des Deutschstudiums Zusammenhänge im Vokabular zwischen *Englisch*, *Japanisch* und *Deutsch*, wenn sie nicht explizit darauf vorbereitet wurden? Können sie intuitiv Wörter und deren Zusammenhänge über Sprachgrenzen und verschiedene Schreibsysteme hinaus erkennen?

Für diese Studie wurden bewusst Studienanfänger gewählt, da evtl. Deutschkenntnisse ausgeschlossen werden und sich die Personen lediglich auf ihre Intuition und ihr bisher erworbenes Sprachwissen verlassen sollten.

Die Fragestellung basiert auf dem Forschungsgegenstand meiner Dissertation *Mit Englisch zum Deutschen. Eine Erforschung von Fremdsprachenvorwissen am Beispiel Japans*. Hierfür wurde gemeinsames Vokabular gleicher und/ oder ähnlicher Wörter zwischen dem Englischen, Japanischen (外来語) und Deutschen recherchiert und zusammengestellt. Die vertretenen Thesen sind:

1. Die Schnittmenge des gemeinsamen Vokabulars (D/E/J) ist für japanische Studierende relevant.
2. Deutschlernende können ähnliches Vokabular (D/E/J) erkennen.
3. Lernende können ähnliches Vokabular durch das Schriftbild erkennen.
4. Lernende können ähnliches Vokabular durch das Hören der Wörter verstehen.
5. Bei großen Abweichungen zwischen dem deutschen und japanischen Wort ergeben sich Probleme bei der Erkennung, selbst wenn das Englische Wort bekannt ist.

In dieser Präsentation wird das Forschungsprojekt vorgestellt und es werden die Studie, die Thesen und die Studienergebnisse präsentiert.

3. 多様化するルクセンブルクにおけるドイツ語識字教育—現場と言語教育政策との関わりから

小川 敦

ルクセンブルクは多言語社会であり、フランス語、ドイツ語、そして近代国家成立以降に国民の象徴として育てられてきた、言語的にモーゼル・フランケン方言の一つであるルクセンブルク語の3言語が日常的に用いられる。書き言葉が存在せず、以前は方言として考えられていたルクセンブルク語が母語であることを前提として、初等教育では標準語が存在するドイツ語で識字が行われる。また、初等教育の媒介言語もドイツ語である。一方、フランス語は小学校2年生の後半から、ドイツ語の後を追うように徹底的に教えられる。1984年の言語法以来、これら3言語が公用語とされているが、伝統的にフランス語の威信性は高く、フランス語の習得と社会的地位は比例するとされてきた。

現在、人口約55万人のうちの約45%が外国籍であり、特に16.5%に相当するポルトガル人を筆頭にロマンス語を母語とする住民が急増している。この状況で、ドイツ語によるこれまでの識字教育は疑問にさらされている。ドイツ語での躓きがその後の教育に影響を及ぼし、社会階層の再生産となりかねない。機会均等や言語権の点からも、ドイツ語ではなくフランス語での識字を行うことや、両言語同時の識字教育を行うことも今後の政策として考えられるが、それは国民像のあり方を根本的に転換するものとなる。

本発表では、これらの点について考察しつつ、現在とられている施策や小学校教育の現場や教員の声を紹介し、今後のルクセンブルクの言語教育政策について考えたい。

ブース発表6 (11:30~13:00)

H会場(1302教室)

ソーシャルメディアの文学的な可能性を考える — カール・クラウスの新聞諷刺を出発点とする考察

河野 英二

文学の条件が根底から問い直されている。かつて社会的コミュニケーションの場を「一対多」の原理で支配していたマスメディアが、ソーシャルメディア（個人がPCやモバイル機器で「一対一」の対話を行うことで現実の人間関係をインターネット上で補完し、さまざまな情報を共有するためのメディア）によって代替もしくは補完されるのに伴い、出版・報道産業が提供する書籍や雑誌は言説の主要媒体の座を専有できなくなったからである。文学研究もこの状況への対応を迫られていると考えられるが、歴史的アヴァンギャルドの延長線上に

位置する「ネット文学」や、インターネット普及時に注目を集めたハイパーテキスト文学の限界を打破しようとしている「ブログ文学」等については、「マスメディアの外部」で文学の新たな可能性を探求する試みとして、独文研究でも考察が蓄積されつつある。そこで格別の参照に値するのが、ブログの先駆とも評される個人誌『ファッケル』と朗読会を媒体として新聞諷刺を展開したカール・クラウスの先例である。作者性とオリジナリティ、事実と虚構の区別、作品の完結性等、出版文化で自明視されてきた諸価値の基準に疑義を呈し、美と倫理を同一の相のもとで捉える感性的な知覚との関わりのなかで、言葉の力を性や人種に関わる暴力から理想追求の推進力へと昇華させる方途を教育的に示したその活動は、今日のメディア文化についての議論を経由させることで、私たちがこれからの文学を考えるための出発点となりうるということが判明するだろう。

ブース発表 7 (11:30~13:00)

I 会場 (1301 教室)

ドイツ語教育・学習者の現状に関する調査報告——教員・学習者を対象とするアンケート結果から——

ドイツ語教育・学習者の現状に関する調査委員会

太田 達也, 高岡 佑介, 生駒 美喜, 磯崎康太郎, 神谷 善弘, 柴田 育子, 藤原三枝子, 星井 牧子, 室井 禎之, 藁谷 郁美, Marco Raindl, Angelika Werner

日本独文学会ドイツ語教育・学習者の現状に関する調査委員会では、ドイツ語教科書協会、ゲーテ・インスティトゥート、Hueber 社、ドイツ語教育部会の協力・支援のもと、2014 年 6 月から 7 月にかけて、ドイツ語の授業が開講されている全国の教育機関（大学・短期大学・高等専門学校・高等学校）でドイツ語科目を担当している教員、およびその教員のクラスでドイツ語を学んでいる学習者を対象としたアンケート調査を実施した（教員 154 名、学習者 3,947 名）。本発表ではその結果について以下の点を中心に報告する。

【教員対象調査】授業における重点項目、教材、ドイツ語使用状況、授業形態、教室環境、教員としてやりがいを感じる要素、など

【学習者対象調査】ドイツ語圏の社会・文化への関心、学習の動機・手段・目標、ドイツ語を学ぶ意義、授業に望むもの、学習への興味、など

なお、ブース会場の外には、学会開催期間中、調査結果を図表にまとめたポスターを掲示する。

Der Vortrag gibt Einblick in die Ergebnisse der zweiten JGG-Umfrage zur Lage des

Deutschunterrichts und von Deutschlernenden an japanischen Hochschulen, Oberschulen und Fachhochschulen, die im Juni/Juli 2014 durchgeführt wurde. Befragt wurden in dieser Umfrage 154 Lehrende und 3,947 Lernende. In der Präsentation wird vor allem über die Einstellungen von Deutschlehrenden und -lernenden zum Deutschunterricht und zum Deutschlernen berichtet. Während der Tagung sind die Ergebnisse auch durchgehend auf Postern einzusehen.